

# 関連性に関する理論

「関連性」概念に対するGrice, Dascal, Sperber & Wilsonの取組み方

Theories of Relevance

Grice's, Dascal's, and Sperber & Wilson's Approaches to the Notion of 'Relevance'

村 越 行 雄

## 要 旨

「関連性」という言葉は、日々の日常的な会話のみならず、哲学、言語学などの専門的な領域においても頻繁に使用されるが、その厳密な定義となると、必ずしも明確にはされていないのである。関連性に関する議論は、様々な形で行われてきたし、また現在でも盛んに行なわれている。その議論の中には、関連性の定義に対して否定的な立場を取る研究者もいれば、肯定的な立場を取る研究者もいるが、今回は関連性の問題を含意との関係で積極的に取り上げる研究者の主張を具体的に検討することにする。なお、関連性そのものに対する取組み方に焦点を合わせて検討することにし、含意自体の検討は必要最小限にすることにする。具体的に検討する対象は、Griceの取組み方、そしてそれに対する批判としてのDascalの取組み方とSperberとWilsonの取組み方である。そして、Grice→Dascal→Sperber・Wilsonの過程を、会話の格率の単なる一部としての関連性の格率→会話の上位格率としての関連性の格率→関連性の原則という具合に、関連性の問題に対する捉え方の変化として見ていくことにする。その過程は、あくまでも関連性に限定して言えば、批判・修正・発展の過程と言えるかもしれないが、含意などの他の様々な要素を加えて考えていくと、必ずしもそう単純には言えないであろう。その点に関しては、今回は取り上げないことにする。検討の順序は、「1 はじめに」、「2 Griceの取組み方」、「2.1 協調の原則と会話の格率」、「2.2 関連性の格率」、「3 Griceの取組み方に対する批判と新たな取組み方」、「3.1 Dascalの取組み方」、「3.2 SperberとWilsonの取組み方」、「4 最後に」となる。

Key words: relevance (関連性), conversational principle (会話の原則), utterance (発話), utterance interpretation (発話解釈), context (文脈), stimulus/attention (刺激と注意), Grice (グライス), Sperber & Wilson (スペルベルとウイルソン)

## 1 はじめに

「関連性 (relevance)」という言葉は、例えば、「・・・に関連がある」という表現をよく耳にするように、日常的な会話の中で頻繁に使用されているが、勿論厳密な定義を知らずに、直観的に、曖昧なままに使用されており、それでも十分会話は成り立っているのである。ところが、哲学、言語学等の専門的な領域においても、頻繁に使用されてきたにもかかわらず、その厳密な定義となると、いまだ研究者の間で定義上の諸問題を巡って様々な議論がなされているのが実情である。勿論、そのような諸議論を通して、有力な候補者と言える関連性の定義が幾つも提案され、関連性の理論が幾つも主張されてきたのも事実であり、またそれらに対する反論が出されてきたのも事実である。そこで、今回は関連性に関する議論を取り上げることにするが、特に定義上の諸問題を浮き彫りにする目的で、関連性に関する定義と理論を比較検討することにする。そのことで、「関連性」という概念が持つその意義を明らかにしていきたいと考えている。

本稿では、特にH.Paul Griceの“Logic and Conversation” (1975) (「論理と会話」)と“Further Notes on Logic and Conversation” (1978) (「論理と会話に関する追加メモ」), Marcelo Dascalの“Conversational Relevance” (1976) (「会話の関連性」), そしてDan SperberとDeirdre Wilsonの共同執筆による“Mutual Knowledge and Relevance in Theories of Comprehension” (1982) (「理解理論における相互知識と関連性」), “Inference and Implicature” (1986) (「推論と含意」), “On Defining Relevance” (1986) (「関連性の定義に関して」), *Relevance* (1986) (『関連性』), そして“Representation and Relevance” (1988) (「表示と関連性」)を中心に検討することになるが、その他の論文、著書も必要な限り使用することにする。また、上記の論文、著書では、含意と深く結び付いた形で関連性が論じられているが、今回は関連性が主題であり、あくまでも関連性に焦点を合わせて、検討を加えていくことにする。従って、含意自体が有する様々な問題の内、本稿で取り上げられないものが多くあることを最初に断っておかなければならない。

訳語について、ここで少し触れておくことにする。最初は、implicatureとimplicationに関してである。Griceがimplicatureを使用して以来、哲学、言語学、その他の専門的領域においては、頻繁に使用される専門用語として重要な地位を確立した言葉となり、一般的には「含意」という訳語が当てられていると思われる(例えば、『語用論』(紀伊国屋書店、1987), 『英語語用論』(研究社出版、1990), 『プラグマティックスとは何か: 語用論概説』(産業図書、1990)などでは、「含意」の訳語が当てられている)。しかし、『関連性理論-伝達と認知-』(研究社出版、1993)では、implicatureには「推意」という訳語が、またimplicationには「含意」という訳語が当てられている。そのような訳語の相違は、implicatureとimplicationに関する

Griceの用法とSperberとWilsonの用法の相違を反映したものと言えよう。例えば、Griceは、発話の中には、発話した言葉の言語的意味以外に、話し手が聞き手に伝えたいと意図していることがある場合があり、それを話し手がimply（暗に示す、ほのめかす、におわせる）、suggest（示唆する、それとなく言う、ほのめかす）、mean（意味する）するものとするが、imply、suggest、meanのそれぞれを使い分けることは容易ではなく、それを避ける為に、それらを包括する動詞としてimplicate（意味を含蓄する）を、その名詞としてimplicatureを導入するのである<sup>(1)</sup>。つまり、発話の言語的意味以外に話し手が伝えたいことがある場合、それを言葉で言い表すのに、imply、suggest、meanの内、どの動詞を使用して表現するのか選択しなければならず、またimplication、suggestion、meaningの内、どの名詞を使用して表現するのか選択しなければならず、そのような選択の煩わしさを避ける為の一種の用語上の操作として、implicateとimplicatureを導入するのである。また、suggest、imply、そしてsuggestion、implicationは、日常的に使用される用語であるのに対して、implicate、implicatureは、Griceによって導入された専門的用語であるという解釈もできる<sup>(2)</sup>（なお、mean、meaningは、別の定義上の問題があるので除外する）。いずれにせよ、Griceにとって、implyとimplicate、implicationとimplicatureは、類似したものであると言える。差別なく、それぞれに「含意する」、「含意」の訳語が当てられることがよくあるが、それはその為であろう。それに対して、SperberとWilsonの場合（『関連性理論－伝達と認知－』の場合）、implicatureがcontextual assumptionとcontextual implicationから構成されるという考えがあり、implicatureとimplicationの用語上の明確な区別が存在しており、その相違を明示する為に、「推意」と「含意」という異なる訳語を当てざるを得ないのであろう。

どのような訳語がより適しているのかを判断するのは、簡単な問題ではないが、本稿では、一応implyとimplicateの訳語として「含意する」を、implicationとimplicatureの訳語として「含意」を当てることにする。第一に、Griceの用法とSperberとWilsonの用法の内、implicatureに関して、前者を受け入れて、「含意」の訳語を統一的に使用しても、後者を受け入れて、「推意」の訳語を統一的に使用しても、また前者には「含意」の訳語を、後者には「推意」の訳語を区別して使用しても、それぞれ支障をきたす可能性があり、どちらの訳語を選択するのかは簡単に決められないが、前者はすでに広く一般的に受け入れられており、もし統一的な訳語を使用する方が便利であると考えれば、前者のGriceの用法を受け入れ、その訳語として一般的に当てられている「含意」を使用する方が、少なくとも現時点では適していると思われるからである。但し、SperberとWilsonにとってのimplicationは、contextual implicationとして使用されているので、「文脈含意」の訳語を当てることにするが。第二に、Griceにとっても、またSperberとWilsonにとっても、implicatureは、推論によって得られる意味（推意）としてある（但し、推論の方法は異なるが）と同時に、言外に含まれる意味（含意）としてもあり、たとえimplication

とimplicatureに異なる訳語を当てるにしても、どちらにどちらの訳語を当てるのか、決めにくいからである。例えば、上記とは反対に、implicatureに「含意」の訳語を当て、implicationに「推意」を当てることはできるであろう。

次は、Griceのprincipleとmaximに関してである。例えば、principleとmaximのそれぞれの訳語としては、『語用論』では、「原理」と「原則」が当てられ、『英語語用論』では、「原則」と「格率」が当てられ、『プラグマティックスとは何か：語用論概説』では、「原則」と「公理」が当てられ、『関連性理論－伝達と認知－』では、「原則」と「格率」が当てられるという具合に、実に様々である。Griceにとってのprincipleとmaximは、前者が上位概念で、後者が下位概念であるという相違はあるが、内容的には連動したものである。つまり、会話における話のやりとりで、従わなければならない原則として、まず上位概念であるprincipleが挙げられ、次にそのprincipleが四つの範疇に分けられ、それぞれの範疇に幾つかのmaximが挙げられるという構成で、principleとmaximは、上位概念と下位概念という相違はあるが、両者とも従わなければならない原則であることには変わりないのである。そこで、そのようなことを反映させる為に、どの訳語を当てるべきかという問題になるが、一つの可能性として、Grice自身が述べているように<sup>3)</sup>、四つの範疇に対して哲学者Kantの用語をそのまま当てている訳で、もしそのことを考慮に入れるとすれば、個人が行なう主観的な行為の規則を意味する実践的原則としての「格率」をmaximの訳語に当て、それに対して「原則」をprincipleの訳語に当てることはできるであろう。しかし、別の可能性が無理であるということにはならない。ともかく、本稿では、一応principleとmaximに対して、「原則」と「格率」のそれぞれの訳語を当てることにする。

以上の訳語の問題は、今回の主題に関わりを持つ重要な用語に関するものである為、取り上げたのであるが、どの訳語を当てるのかは、単純に判断できるものではなく、厄介な問題を多く内包しているものであり、従って最終的な結論を述べたのではなく、あくまでも用語上の（訳語上の）混乱を避ける意味で、簡単に本稿でどの訳語を使用するのかを述べたにすぎない。なお、その他の訳語に関しては、これ以上触れないことにする。

## 2 Griceの取組み方

1967年にハーバード大学で行なわれたGriceのウィリアム・ジェームズ講義（William James Lectures）は、七回にわたる講義であったが、その講義録のコピーが、その後数年間にわたり哲学者、言語学者などの研究者の間で非公式に回覧され、極めて強い影響力を与えた。その内、第二講義が1975年に“Logic and Conversation”として、第三講義が1978年に“Further Notes on Logic and Conversation”として、第五講義が1969年に“Utterer’s Meaning and Intentions”（「発話者の意味と意図」）として、更に第六講義が1968年に“Utterer’s Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning”（「発話者の意味、文の意味、そして単語の意味」）

として出版され、遂に1989年に七回の講義すべてが*Studies in the Way of Words*（『言語慣習に関する研究』）という題目でハーバード大学出版局から出版された。今回検討のために取り上げるのは、“Logic and Conversation”（1975）と“Further Notes on Logic and Conversation”（1978）である。あるいは、実際によく言われるのであるが、むしろ*William James Lectures*（1967）（「ウイリアム・ジェームズ講義録」）という言いの方が、年代的に正確に表すという意味で、適しているかもしれない。つまり、Logic and Conversationに関するGriceの考え方が研究者の間で広まっていったのが、“Logic and Conversation”が出版された1975年からではなく、実際はウイリアム・ジェームズ講義が行なわれた1967年からであることを明確にするという意味で言えば、適しているからである。それはともかくとして、上記の出版された論文の年代を使うことにする。

## 2.1 協調の原則と会話の格率

“Logic and Conversation”（1975）におけるGriceの基本的な考え方は、発話の解釈において、重要な要素となる会話含意（conversational implicature）（以下、簡単に「含意」を使用する）をどのような推論過程を通して把握していくのかという課題に対して、協調の原則（Cooperative Principle）と会話の格率（conversational maxims）の関係から解決策を見い出そうとすることにあり、簡単に言えば、協調の原則と会話の格率の関係から含意を解明し、それによって発話解釈の仕組みを解明しようと試みることにあると言える。それは、すべての発話において、話し手が実際に口に出して言う言葉の文字どおりの意味（純粋な言語的意味）を理解するだけで、それだけで話し手の伝えようとする意図をすべて理解できるのであれば、別に問題はないであろうが、ところがそうでないのが現実で、それを解明する必要があるという認識に基づくものである<sup>4)</sup>。そこで、協調の原則と会話の格率の関係について、調べてみることにする。

### (1)：協調の原則

Our talk exchanges do not normally consist of a succession of disconnected remarks, and would not be rational if they did. They are characteristically ,to some degree at least, cooperative efforts;and each participant recognizes in them, to some extent, a common purpose or set of purposes, or at least a mutually accepted direction. This purpose or direction may be fixed from the start (e.g., by an initial proposal of a question for discussion), or it may evolve during the exchange;it may be fairly definite, or it may be so indefinite as to leave very considerable latitude to the participants (as in a casual conversation). But at each stage, *some* possible conversational moves would be excluded as conversationally unsuitable. We might then formulate a rough general principle which participants will be expected (*ceteris paribus*) to ob-

serve, namely: Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged. One might label this the *Cooperative Principle*.<sup>(5)</sup>

(話のやりとりは、普通前後に全く関わりを持たない言葉がただ並んでいるものではない。もしそうだとしたら、理性的ではなくなってしまうであろう。それは、少なくともある程度までは、協調的な作業という特徴を持つものであり、参加者はそれぞれがそのやりとりで、ある程度、共通の目的、あるいは一連の目的、あるいは少なくともお互いが受け入れられる方向というものを認めるのである。この目的あるいは方向は、最初からはっきりと決められる場合もあれば(例えば、討論における最初の問題提起)、話のやりとりの中で徐々に現われてくる場合もあるし、またかなり明確な場合もあれば、漠然として、参加者が自由気ままに話せる場合もある(何気ない、ふとした会話のように)。しかし、それぞれの段階で、会話における可能な動きの内、あるものは会話に適合しないものとして除外されてしまう。従って、参加者が(他の条件が同じならば)守るように求められる大雑把な一般原則は、次のようにまとめられる。即ち、会話をする時、自分が参加している話のやりとりで、すでに受け入れられている目的あるいは方向にとって必要となるような会話への貢献をなさい。これを協調の原則と呼ぶのである。)

以上の一般原則としての協調の原則は、四つの範疇に分類され、それら四つの範疇は、哲学者 Kantの用語をそのまま当てて、「量 (Quantity)」、「質 (Quality)」、「関係 (Relation)」、「様態 (Manner)」と呼ばれる。そして、それら四つの範疇には、幾つかの格率が挙げられる。

## (2): 会話の格率

量の範疇 (the category of Quantity) : 提供される情報量に関係するもので、二つの格率が挙げられる。

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).

( (話のやりとりの現在の目的にとって) 必要なだけの情報量を提供するような貢献をなさい。)

2. Do not make your contribution more imformative than is required.

(必要以上の情報量を提供するような貢献はすべきでない。)

質の範疇 (the category of Quality) : 上位格率 (supermaxim) 「自分の貢献を真実に基づいたものにしなさい」 (“ Try to make your contribution one that is true”), そして更に二つの特殊な格率がある。

1. Do not say what you believe to be false.

(偽であると信じていることは言わない。)

2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

(十分な証拠のないことは言わない。)

関係の範疇 (the category of Relation) : 格率は一つあるだけ。

Be relevant. (関連性を持たせなさい。)

様態の範疇 (the category of Manner) : 今までの三範疇とは異なり, 何を言うのかではなく, いかに関係するものか, 上位格率「明瞭に話しなさい。」 (“ Be perspicuous”) と更に四つの格率がある。

1. Avoid obscurity of expression. (不明瞭な表現を避けなさい。)

2. Avoid ambiguity. (曖昧さを避けなさい。)

3. Be brief (avoid unnecessary prolixity). (手短かに話しなさい (不必要にくどくなることは避けなさい)。)

4. Be orderly. (順序よく話しなさい。)<sup>16)</sup>

(Griceの範疇と格率について。例えば, 量に関して言えば, 量の範疇があり, それに属する二つの格率が内容的に量に関するものであるから, 量の格率 (Maxims of Quantity) となり, 同様に, 質の範疇そして質の格率 (Maxims of Quality) があり, 様態の範疇そして様態の格率 (Maxims of Manner) があることになるが, 関係に関しては, 関係の範疇に属する格率は一つしか存在せず, 「関連性を持たせなさい」であるが, その格率の内容から判断すれば, 関連性に関するものであるから, 一般的には「関連性の格率」と呼ばれ, その為「関係の範疇 (the category of Relation) 」そして「関連性の格率 (Maxim of Relevance) 」となる。)

以上のように, 会話における話のやりとりで, 参加者が従わなければならない原則は, 協調の原則の提唱→量, 質, 関係, 様態の四つの範疇への分類→各範疇に属する格率の列挙という手順で説明される。そこには, 会話で参加者が従わなければならない会話の原則に関して, 単一の最高位に位置する会話の原則 (a single supreme Conversational Principle) としての協調の原則が上位を占め, それを基にして生み出され, しかもそれによって正当化される, 協調の原則よりは特殊であるが, しかしまだ十分一般的な会話の原則としてある会話の格率が下位を占めるという構図が存在しており<sup>17)</sup>, 結局一般 (協調の原則) →特殊 (会話の格率) →個別 (個々の具体的な会話の事例) という構図をGriceが心に描いていたと言える。従って, 最も重要な位置を占める (つまり, 最高位に位置する) 協調の原則が否定されれば, 会話の格率の存在意義は失われることになり, その意味もあって, のちにGriceは, 会話の格率は概ね受け入れられたが, 協調の原則は必ずしもそうではないとして, 再び協調の原則の必要性を強調するのである<sup>18)</sup>。

最高位に位置する会話の一般原則とそれに対する会話の特殊な原則という具合に, あるいは, G.M.Greenが指摘するように<sup>19)</sup>, あくまでも協調の原則の様々な特殊なケースが会話の格率と呼ばれるという具合に, 協調の原則と会話の格率の関係は, 緊密で, 切り離すことのできない

関係である。例えば、会話において、その参加者が協調する意志を全く持たずに、お互いが必要な情報を与えず、嘘、関連のないこと、不明瞭なことばかりを言っていては、会話は成り立たなくなってしまうが、しかし、たとえ協調の原則だけがあっても、それだけでは具体的にどのような形でお互いが協調していくのかが不明で、会話で従わなければならない原則としては曖昧すぎるし、また会話の格率だけで、必要な情報を与え、正直に、関連性を持たせて、明瞭に言うべきであるとしても、それを正当であると主張する為の根拠がなければ、なぜそうすべきなのか不明であり（多分、道徳的な価値判断で、嘘は言うてはいけないとか、相手を困らせてはいけないとか、言うことになるのであろう）、従って、協調する意志があって初めて、具体的にどのように協調するのが問題になり、また具体的に何をなすべきかが分かっている、それを正当化する為の根拠となる協調という原則があって初めて、その意味が生きてくるのであり、結局協調の原則を基にして会話の格率が生まれ、しかも前者によって後者が正当化される訳で、ある意味では、同一物の二つの側面という関係にあると言えよう。そのような関係にある協調の原則と会話の格率は、いつも必ず守られているのであれば、問題はないであろうが、実際はそうではないのである。

例1：

A : Is it raining outside? (「外は、雨が降っているのかい。」)

B : yes, it is. (「うん、降っているよ。」)

例えば、Aがただ単に雨が降っているかどうかを知りたくて、Bに質問しただけで、それ以外のことは全くなく、しかもそのことをBが理解できるように意図し、そしてそのAの質問の意図をBが正確に把握しているとした場合、Bは、Aの質問にきちんと返答しており（協調の原則を守っている）、しかも雨が降っているかどうかの質問に答えるのに必要な情報（多くもなく、また少なくともない情報量）を与え、実際に窓の外を見て、真実を言い、質問に関連のあることだけを言い、明瞭に答えていることになる。従って、Bは、協調の原則だけでなく、会話の格率全てを守っており、含意を伴っていないので、Aは、Bの発話の言語的意味を理解できれば、Bの意図を把握できることになる。

例2 (Griceの例)：

Aは、哲学を教えるポストの候補者になっている学生について次のような推薦状を書いたとする。

Dear Sir, Mr. X's command of English is excellent, and his attendance at tutorials has been regular. Yours, etc.<sup>00</sup>

(拝啓 X氏の英語力は優秀で、授業にはいつも出席していました。敬具...)

Aは、哲学の教師を採用しようとしている学校のBがどのような情報（哲学教師になるのに適した能力をXが持っているかどうかの情報）を求めているのか知っており、自分の教え子であるXの哲学に関する能力についても知っている、協調の原則を守って、しかも会話の格率を守っ



て、Bの知りたがっているXの哲学教師としての能力に関して、必要な情報量（量）、真実の情報（質）、関連のある情報（関連性）を与え、明瞭に伝えること（様態）ができる立場にいるのである。しかし、Aは、Xの英語力と出席状況しか伝えなかったのである。そこで、まずAは、少なくとも推薦状を書いたのであるから、協調の原則は守ったことになるが（協力する意志がなければ、推薦状を書かなければいい訳で、その場合は、協調の原則に違反することになる）、必要な情報量を与えなかったため、量の第一格率に違反したことになる。それは、真実で、関連のある情報を明瞭に書けないという事情が背後にあり、その為に必要な情報量を与えることができなかったことを意味している。その事情とは、もし真実で、関連のある情報を明瞭に書けば、哲学教師になる資格がXにはないことをBに直に、はっきりと伝えることになるが、それがAにはできないということである。むしろ、Aは、必要な情報量を与えることができなかったことで（量の第一格率に違反することで）、つまり真実で、関連のある情報を明瞭に書けなかったことで（質、関連性、様態の格率を守って、推薦状に書こうと思えば、書ける訳で、推薦状に書かなかったのは、決して質、関連性、様態の格率の違反でもなく、また遵守でもなく、ただ問題は、書けるのに、推薦状に書けなかったことで）、しかもそのこと（量の第一格率の違反）をBに理解させることで、Xが哲学教師には不適格な人物であることをBに暗に伝えようと意図したのである。つまり、Aは、量の第一格率の違反を通して、Xが哲学教師には不適格な人物であることをBに含意したのであり、しかもBがその違反を理解し、その含意をB自らが推論してくれるように意図したのである。それに対して、推薦状を受け取ったBの側から見れば、Aが協調の原則のみならず、会話の格率も全て守って、自分の求めている情報を全て提供できる立場にいることを知っており、それなのに必要な情報を提供しなかった（提供できなかった）のは明らかで、そのことでBは、Aが必要な情報量を提供しなかったこと（提供できなかったこと）、つまり真実で、関連のある情報を明瞭に書けなかったこと（提供できなかったこと）の理由を考え、量の第一格率に違反したこと、推薦状には書かれていない含意があり、そのことをAがBに伝えようと意図していることを理解し、最終的にXが哲学教師には不適格な人物であることをAが含意していることを把握するのである。

例1と例2を比較すれば明らかなように、協調の原則と会話の格率がいつも必ず守られている訳ではなく、違反されることも実際には多くあり、またGriceにとっては、協調の原則の遵守は大前提で、むしろ会話の格率の内、いずれかが違反されることによって含意が生み出されることになるのである。勿論、例2以外にも、多くの例が挙げられ、ある格率が違反される場合（例えば、例2のように、相手の求める情報を全て推薦状に書ける立場にいながら、つまり会話の格率全てを守ることでできる立場にいながら、敢えてそれをしなかったのは、質、関連性、様態の格率の遵守・違反とは関係なく、別の理由によるもので、従って量の第一格率に違反しただけとなる）だけでなく、ある格率を守る為に、別の格率が違反されたり（ある質問に対して返答する時、相手の要求に応えるのに必要な情報量の内、提供できる情報はその一部にすぎず、もしそれ以上

の情報を提供しようとするれば、偽であると信じている情報や十分な証拠のない情報を提供することになってしまうので、質の第一格率あるいは第二格率を守る為に、量の第一格率に違反して、必要な情報を全て提供するのではなく、その一部の真実に基づく情報だけを伝える場合）、またある格率が一見違反されているようで、実は守られていたりする（関連性の格率はその典型で、そのことについてはあとで述べることにする）場合もあり、それらにおける含意の生成が説明されるのである。

含意の説明は、むしろある種の整合性の問題として捉えるべきである。では、どのような形で説明できるのであろうか。Griceは、会話を合目的で、理性的な行動（purposive, indeed rational, behavior）<sup>11)</sup>の一種であると定義（「ある目的にかなった、理性的な行動」という定義そのものには曖昧さがあるが）するが、その合目的・理性的行動の実現の可能性から検討を加えていくことにする。合目的・理性的行動を可能にし、実現するのに必要なのが、協調の原則と会話の格率であり、その関係は、すでに「同一物の二つの側面」と言ったが、正に合目的・理性的行動の実現が協調の原則の遵守と会話の全ての格率の遵守という二つの側面から構成されるという関係、言い換えれば、協調の原則が遵守され、しかも会話の格率が全て遵守されることで、合目的・理性的行動が実現するという関係のことである。そこには、全体を構成する部分が全て調和した形できちんと合わさっている関係が存在し、ある種の整合性が見られるのである。その整合性は、協調の原則の遵守と会話の全ての格率の遵守を基にして形成されるものであるが、いつも必ず全てが遵守されるとは限らない。ある格率が違反（見かけ上の違反と真の違反を含むものとする）されれば、そこに欠落した部分が生まれ、結局不整合性が生まれることになる。もしそのまま終わってしまえば、不整合性は不整合性のままで終わることになる。例えば、相手の求める情報に対して、必要な情報量を提供しなかったり、関連のない情報を提供したりするだけで、それだけでは二人の間の伝達機能が十分働いているとは言えない。しかし、協調の原則は遵守されているという前提に立てば、発話される言語の段階では表に現われてこない含意が潜んでいることが分かり、その含意が欠落部分を補い、そのことで整合性が取り戻されるのである。つまり、ある格率の違反によって生まれる欠落部分は、あくまでも表面に現われる言語の段階でのことであり、不整合性もまた同様であり、その言語段階での欠落部分が、言語として表面に現われない含意によって補われ、そのことで言語段階での不整合性が、あくまでも含意の段階で整合性を取り戻すのであって、決して言語段階で、欠落部分が完全に埋められる訳でもなく、不整合性が消えて、整合性が取り戻される訳でもなく、含意段階に至って初めて、欠落部分が間接的に補われ、整合性が取り戻されるのである。例えば、質問－返答という話のやりとりにおいて、表面的な言語の段階で、二人の発話が完全に噛み合っていない場合、再度質問し、それに対して返答し、まだ噛み合っていないければ、更に質問し、それに対して返答し、それを繰り返すことによって、最終的に言語段階での欠落部分が言語によって完全に埋められ、言語段階での整合性が

取り戻されることになるが、そのような繰り返しがいつも行なわれる訳ではなく、一回の質問－返答だけで終わることがあり、その場合は、言語段階での欠落部分が含意段階で間接的に補われ、言語段階での不整合性が含意段階で整合性を取り戻すことになるのである。結局、含意段階を加えることによって（簡単に言えば、含意を考慮に入れることによって）、表面的にはどうであれ、整合性が取り戻され、そのことで伝達機能が十分働くことができ、合目的的・理性的行動としての会話が成立することになるのである。もしそうであれば、合目的的・理性的行動と整合性について、次のように言える。

(3)：合目的的・理性的行動は、協調の原則の遵守と会話の全ての格率の遵守によって実現されるだけでなく（言語段階での実現、あるいは含意を伴わない発話における実現）、協調の原則の遵守は必要であるが、たとえ会話の格率にある違反（見かけ上の違反と真の違反を含む）があっても実現されことになり（含意段階での実現、あるいは含意を伴う発話における実現）、そして整合性も同様に、協調の原則の遵守と会話の全ての格率の遵守によって形成されるだけでなく（言語段階での整合性の形成、あるいは含意を伴わない発話における整合性の形成）、協調の原則の遵守がある限り、たとえ会話の格率にある違反（見かけ上の違反と真の違反を含む）があっても、言語段階での不整合性が生まれても、含意段階で取り戻されるのである（含意段階での整合性の回復、あるいは含意を伴う発話における整合性の回復）。

以上のことを踏まえて考えれば、Griceの抱える問題点が多少明らかになるであろう。例えば、Griceの基本的な考え方と(3)についてである。前述したように、協調の原則と会話の格率の関係から含意を解明し、それによって発話解釈の仕組みを解明しようとすることにGriceの基本的な考え方がある。言い換えれば、含意を伴う発話を中心に、それを協調の原則の遵守と会話の格率のある違反によって解明しようとし、その為に含意を伴わない発話を協調の原則の遵守と会話の全ての格率の遵守の関係からいかに説明していくのかという課題は、脇に追いやられてしまっていると言える。勿論、Griceの目標は、あくまでも含意の解明にあり、発話において含意がいかにして生成されるかを問題にしているのだから、当然の結果であると言えようが、協調の原則と会話の格率の遵守と違反を検討する以上、含意を伴わない発話も当然解明する必要性が出てくるのではなかろうか（協調の原則と会話の全ての格率を遵守する場合、本当に含意が生成されないのであれば、その理由を明確にする必要があり、もし何らかの形で含意が生成されるのであれば、同様にその理由を明確にする必要があり、また協調の原則と会話の格率を完全に遵守することが果たして可能であるのかも明確にする必要があるであろう。なお、ここではそれらのことは問題にしないことにする）。ともかく、会話を合目的的・理性的行動であると定義する以上、協調の原則の遵守と会話の全ての格率の遵守によって実現される合目的的・理性的行動の解明が不可欠であり、それにより(3)のような結果に到達するはずであるが、実際はそのような解明は脇に追いやられ、含意の解明が中心になってしまっている為、Griceは、(3)の内、合目的的・理性的行動と

整合性のそれぞれの後半部分のみを対象にして分析していると言っても構わないであろう（但し、(3)そのものがGriceの主張を反映しているものではないので、単純な言い方はすべきではないが、ただGriceが対象にしているのが、(3)の内の一部にすぎないことを明らかにしたいだけである）。

更に、「合目的的・理性的行動」、「協調の原則」、「会話の格率」などの用語を見れば、会話を構成する最小単位である個々の発話ではなく、あくまでも会話全体を対象にし、それを解明するのがGriceの目的であるという印象を受けるし、また事実それがGriceの本来の目的なのであろう。ところが、実際は個々の発話を、より正確に言えば、協調の原則と会話の格率という会話の全体的な視点から個々の発話を検討対象にし、それで終わってしまい、それを会話全体に発展させるまでには至っていないと言えよう（その意味で、協調の原則と会話の格率の関係から会話全体の仕組みを解明することではなく、むしろ個々の発話（特に、含意を伴う発話）解釈の仕組みの解明に終始していると言えよう）。それは、Griceの検討する例が個々の発話の段階で終わってしまい、それ以上には出ていないことから明らかであろう。それだけでなく、もしGriceが会話全体の仕組みを解明しようとするならば、次のような結果に到達するはずであるが、そこに到達していないことから明らかであろう。つまり、会話というものは、たとえどのような種類のものであれ、様々な発話の集合体としてあり、しかも最初から最後まで全て含意を伴わない発話だけから構成されているとか、逆に全て含意を伴う発話だけから構成されているとするのは、実際問題として考えにくいことで、むしろ含意を伴わない発話と含意を伴う発話が複雑に組み合わさった混合体としてあり（ここでは、「会話」を広義に解釈して、日常的な挨拶から大学の演習、法廷までを含むものとして使用する、即ちいわゆる「談話（discourse）」として使用する）、従って協調の原則と会話の格率の遵守と違反の複雑な組み合わせによって説明されるべきものである。それは、以下のようになる。

(4): 会話の全体的な視点から見て、本来の意味での合目的的・理性的行動の（満足のいく）実現は、協調の原則の遵守を前提にしながら、会話の格率の遵守と違反（見かけ上の違反と真の違反を含む）の複雑な繰り返しの組み合わせによって可能になり、従って含意を伴わない発話と含意を伴う発話の複雑な組み合わせから成る発話の集合体の中で可能になるのである。基本的には、(3)が会話における個々の発話に、そして(4)が会話全体に適用されるもので、後者は前者に基づいて、それを会話全体に発展させたものである。そして、Griceの主張には、(4)が見られないのである。勿論、Griceは、あくまでも会話における最も厄介な含意を伴う発話をまず最初に片付けてしまおうとしているだけで、それで終えるつもりはなく、むしろ会話全体の仕組みの解明はその後の課題であると解釈することはできる。

結局、Griceの問題点は、簡単に言えば、会話全体の視点から協調の原則と会話の格率を分析する目的を持ちながら、実際は個々の発話を分析対象にし、それを会話全体に発展させることができず、しかも含意を伴う発話を中心に分析し、その為に含意を伴わない発話の分析が欠落して

いることにある。そのような問題点があるからこそ、様々な批判が生まれてくるのである。例えば、Jaakko Hintikkaは、Griceが会話（Hintikka自身は、「談話」を使用しているが）全体の性質の説明の重要性を強調したことを高く評価する一方で、残念ながら、実際は会話における様々な発話の相互作用ではなく、単一の発話を分析し、説明しているにすぎないと批判し<sup>12</sup>、またSperberとWilsonは、Griceが含意を伴う暗示的伝達のみを分析しているにすぎないと批判し、むしろ明示的伝達と暗示的伝達を含む全体を説明すべきであると主張する<sup>13</sup>という具合に。なお、(3)と(4)は、Grice自身が主張していることではなく、むしろGriceの主張をGriceの方向に従って発展させた結果にすぎないが、ただ(3)と(4)に発展させることによって、あくまでもGrice的な方向に沿った形でも、ある程度はHintikka, Sperber, Wilsonなどの批判に対して反論することはできるであろう。但し、例えば、SperberとWilsonは、Grice批判を通して新たな理論を構築するのであるが、その理論と、(3)と(4)を基にしてできる新たなGrice的な理論のどちらがより評価されるべきかをここで問題にするつもりはなく、従って(3)と(4)を正当化するつもりはなく、ただ(3)と(4)によってGriceの問題点を多少なりとも取り除くことができることを述べているにすぎない。そして、(3)と(4)を受け入れるとするならば、会話を構成する個々の発話から見ても、更に会話の全体的な視点から見ても、合目的・理性的行動というものは、ただ単に協調の原則の遵守と会話の全ての格率の完全な遵守によって実現されるだけでなく、協調の原則の遵守と会話の格率のある違反によっても実現されるべきもので、正確に言えば、両者の複雑な繰り返しの組み合わせによって初めて実現されるものとして捉えるべきであろう。それは、個々の発話にも、また会話全体にも当てはまるものである。というのは、個々の発話は、決して全体から切り離された、隔離された状態にあるのではなく、あくまでも会話という全体を構成する一要素として存在する訳で、個々の発話の段階での合目的・理性的行動の実現の可能性は、勿論それ自体として解明される必要性があり、重要性もあるが、会話全体の段階での本来の意味での合目的・理性的行動の実現の可能性との関係で解明されるべきもので、そのことによって初めてより鮮明な形で把握されることになるからである。

会話の格率について、Griceは、ごく簡単ではあるが、次のような指摘をしている<sup>14</sup>。第一に、会話の格率の全てが同等に位置付けられるものではなく、質の格率が最も重要な位置を占め、質の格率の遵守を仮定して初めて、他の格率が機能し得るとしている。第二に、会話の各格率は、決して相互に独立した存在ではなく、相互に絡み合う関係にあるとしている（例えば、提供する情報量が必要以上なのか、それとも必要以下なのかは、話のやりとりにおける話題との関連で判断できるもので、そこに量の格率と関連性の格率の絡み合いが見られるという具合であるが、それ以上に、会話の全ての格率が具体的にどのような相互作用の下にあるのかについて明らかにされている訳ではない）。第三に、会話の格率は、単に量、質、関連性、様態の格率だけでなく、その他にも、例えば、美的、社会的、あるいは道徳的な性質を持つ格率（「丁寧にしなさい」

(Be polite) を例として挙げている) も可能であるとしている。以上の三点は、会話の仕組みを知る上で重要な役割を果たすものと思われるが(少なくとも、Grice的な方向に沿った形で会話の仕組みを知る上で)、指摘の域を出ておらず、不明瞭なままに残されているのである。それに加えて、量、質、関連性、様態の各格率の意味自体も、必ずしも明確になっているとは言えないのである(特に、関連性の格率について)。結局、協調の原則と会話の格率の全体的な関係が、曖昧なままに残されているのである(但し、その基本的な骨組みというようなものは示されていると言えるが)。そして、その曖昧さが、多くの批判的になっているのである。例えば、Ruth M.Kempsonは、会話の格率を曖昧で、中身のないものと決め付け<sup>15</sup>、Gerald Gazdarは、E.O.Keenanの“On the Universality of Conversational Implicature”(1976)(「会話含意の普遍性に関して」)における「マダガスカル語」の例を引用して、会話の格率が適用できない社会が存在する以上、会話の格率にはある特定の社会、文化に限定された適用しかなく、普遍的ではないと批判し<sup>16</sup>、Jerrold M.Sadockは、協調の原則と会話の格率が曖昧すぎて、どのような意味にも取れるし、どのような含意を生み出すこともでき、また各格率の関わりとそれぞれの役割が不明であると批判し<sup>17</sup>、F.Recanatiは、言語哲学者の間では、会話の格率の性質に関してまだ合意が得られず、むしろ複数の格率を単一の原則に単純化しようとする提案が出される程であるとし<sup>18</sup>、R.A.Van Der Sandtは、会話の格率が曖昧な為に、含意の特定化ができないと批判し<sup>19</sup>、SperberとWilsonは、会話の格率の内容が全く定義されないままで済まされ、また協調の原則と会話の格率の背後に潜む論理的根拠が不明で、格率が一体幾つ必要なのかもはっきりしないと批判する<sup>20</sup>という具合である。

以上のような批判がある一方で、例えば、Dascalのように、関連性の格率を除く他の格率については明確に述べられており、またその意味についてもある程度ははっきりしているという意見があり、その他にも賛同の意見を表す研究者が実に多くいることも事実である。どちらの立場に立つのかは別にして、Grice自身、量の第二格率にはまだ議論の余地があること、そして関連性の格率に関する定義の難しさを認めており、更に会話の格率の中で質の格率を最高位に位置付けるとして、その他の各格率をそれぞれどのように位置付けるのか、各格率の間の相互関係をどのように決めるのか、量、質、関連性、様態の格率以外に別の格率があるとして、具体的にどのような格率が必要で、全体の中でどのように位置付けるのか、会話の格率の数は幾つ必要なのか、などの問題に解答を明示している訳ではなく、簡単に言えば、曖昧さが残されているのは確かなのである。その曖昧さを批判材料にして、Griceの主張を否定して、新たな方向に進むべきなのか、それともGriceの方向を修正・改善して更に押し進めて行くべきなのか、どちらの方向を取るべきかは、ここで結論を出すつもりはないが、Griceの基本的姿勢と言うべきものは、広く一般的に受け入れられ、様々な形で活用されているのであり、その事実は否定されるべきではないのである。例えば、Greenによれば、Griceの真の貢献は、会話が格率によって規制されている

と仮定することによって初めて、字義通りに受け取ると論理的とは思えないが、それでも言われた言葉以上のことを伝えようとする用法が説明できるという観察にあることになる<sup>22</sup>。単なる観察なのか、それとも観察以上のことなのかはともかくとして、そこにGriceの基本的姿勢があると言える。例えば（例3）、ある人が「村越君に手紙を書きたいのだが、どこに居るか知っているかい。」と言ひ、別の人が「軽井沢。」と言う場合、もし協調の原則がなければ、相手の言うことを無視して、全く別のことを言っているにすぎないとも受け取れるのであって、協調の原則が遵守されていると仮定することで、質問に対する返答であると説明でき、そして会話の格率によって規制されていると仮定することで、質問によって要求されている必要な情報量（手紙を出す以上、もっと正確な居場所を知りたいのである）が提供されていないので、量の第一格率に違反しているが、決して知っていて教えないのではなく、知らなくて教えられない訳で（例2とは、この点が異なる）、要求されている必要な情報量を提供しようとするれば、質の格率（偽であると信じていることは言わない、あるいは十分な証拠のないことは言わない）に違反することになり、従って質の格率を遵守する為に、量の第一格率に違反し、そのことで間接的に（はっきりと直接的に「詳しくは知らない。」と返答するのではなく）「詳しくは知らない。」を伝えようとしており、つまりそのことを含意していると説明できるのである。以上のように、協調の原則と会話の格率によって規制されていると仮定することで、含意を伴う発話を説明することができるのであり、そこにGriceの基本的姿勢があるのである。Griceにとっての問題は、むしろそのような基本的姿勢をどこまで一貫して維持していくことができるのかである。含意を伴う発話に限ってみても、実に様々な発話の場面が考えられ、それら全ての発話の場面を論理的に、説得力のある形で説明し、処理していく為には、上記のような曖昧さを取り除く必要があると言える。更に、前述したように、個々の含意を伴う発話の解明に焦点を合わせることで、含意を伴わない発話をも含む会話全体の解明が曖昧なままに残されているのである。そのような曖昧さが問題となり、批判的になってしまっている訳で、たとえGriceの基本的姿勢を受け入れるとしても、そのような問題点をどのように処理するかによって、先に述べたように、Griceから離れて、別の方向に進むのか、それともGriceの方向に沿って更に発展させていくのか、異なる方向に分かれてしまうのである。

## 2.2 関連性の格率

「関連性」概念に対するGriceの取組み方は、会話の格率の中の関連性の格率において示されている。そのような背景がある為、関連性の格率に入る前に、協調の原則と会話の格率について検討してきたのである。しかし、関連性の格率は、会話の格率の中でも特に不明瞭な格率で、Griceの真の意図がどこにあるのかを確定することは容易ではない。従って、断片的な材料を集めて、それを基にして推測するしかないのである。

“Logic and Conversation”と“Further Notes on Logic and Conversation”で、Griceは具体例を前者では四つ、後者では一つ挙げて、簡単な説明を加えている。その他に、前者で関連性について述べている箇所が三つある。それらについて、調べてみることにする。

(5) : 関連性の格率（「関連性を持たせなさい。」）について、次のように述べている。

Though the maxim (関連性の格率) itself is terse, its formulation conceals a number of problems that exercise me a good deal: questions about what different kinds and focuses of relevance there may be, how these shift in the course of a talk exchange, how to allow for the fact that subjects of conversation are legitimately changed, and so on. I find the treatment of such questions exceedingly difficult, and I hope to revert to them in a later work.<sup>23</sup>

（その格率（関連性の格率）自体は簡潔であるが、その明確な表現の裏には、私を本当に悩ます問題が多く潜んでいるのである。つまり、関連性にはどれ位の異なる種類のもの、そして焦点が存在するのか、話のやりとりの中で、それらはどのように移っていくのか、会話のテーマが妥当と認められる形で変更されるという事実をどのように考慮すべきであろうか、などの問題である。それらの問題について論じるのは、極めて難しいように思われる。また別の機会に、それらの問題を論文で取り上げることができればと思っている。）

(6) : 話を合目的・理性的行動の一種であるとした上で、話のやりとり以外の出来事におけるやりとりを例に挙げて、関連性について述べている。

I expect a partner's contribution to be appropriate to immediate needs at each stage of the transaction; if I am mixing ingredients for a cake, I do not expect to be handed a good book, or even an oven cloth (though this might be an appropriate contribution at a later stage).<sup>24</sup>

（やりとりの各段階に直接関係のある要求に適するような貢献を仲間に望むものである。ケーキの材料を混ぜている場合、立派な本や、あるいはオーブクロスを手渡してほしいとは望まないものである（あとになれば、適切な貢献となるかもしれないが）。）

(7) : 協調の原則と会話の格率の遵守の妥当性（合理性）は、次のように示されるとしている。つまり、会話の中心となる目標（例えば、情報を与えたり、受け取ったり、あるいは影響を与えたり、受けたりする）に関心を持つ人は誰でも、当然の事として、協調の原則と会話の格率に従うと仮定して初めて、利益を生み出すような話のやりとりに参加したいと興味を抱くものである。そして、次のように言う。

Whether any such conclusion (協調の原則と会話の格率の遵守の妥当性) can be reached, I am uncertain; in any case, I am fairly sure that I cannot reach it until I am a good deal clear about the nature of relevance and of the circumstances in which it is



required.<sup>25</sup>

(そのような結論(協調の原則と会話の格率の遵守の妥当性)に到達できるかどうかは、確信が持てない。いずれにしても、関連性の性質、そして関連性が求められる状況の性質について、今よりも遙かにずっと明らかにならなければ、そのような結論に到達できないことは、十分確信が持てるのである。)

(7)において、協調の原則と会話の格率を遵守することが妥当であるとか、合理的であるとかを示す為には、言い換えれば、協調の原則と会話の格率を正当化する為には、その前にまず関連性について明確にされていなければならないとしているが、どのような意味であろうか。明確にされなければならないとGriceが言う関連性とは、どの段階での関連性を問題にしているのであろうか。最初は、あくまでも会話の格率の段階での関連性を問題にしているのであるが、ただ質の格率と同様に、関連性の格率も会話の格率の中では重要な位置を占めていると解釈できよう。あるいは、質の格率よりも重要な位置を占めているとも解釈できよう。例えば、発話のやりとりにおいて、真実に基づいたこと(あるいは、真実であると信じていること)を言うことが重要であるのと同様に、あるいはそれ以上に、発話間につながりができ、そこに関連性が存在することが重要であると言えよう。次は、会話の格率の段階ではなく、むしろ協調の原則と同等の段階での関連性を問題にしているのであり、従って関連性の原則を問題にしていると解釈できよう。例えば、Griceの協調の原則は、話のやりとりにおいて、参加者各人がある共通の目的を認識し、その目的にとって必要な発話をしなければならないということであるが、目的にとって必要な発話とは、発話が目的に対して関連性を持つことであり、従って目的にとって必要な発話をしなさいという協調の原則は、目的に対して関連性のある発話をしなさいという関連性の原則を意味していると言えよう。更に、会話の開始時における心理的な段階での関連性を問題にしているのであり、関連性→協調の原則→会話の格率という位置関係にあると解釈できよう。例えば、協調の原則も、会話の格率も、全て会話を前提にしているが(つまり、会話の開始を前提にしているが)、その前段階として、なぜ会話を始めるかが問題であり、そこで人は自分に関連性のあるものに関心を抱き、その対象に注意を向けて、行動を開始する性質を持っており、従って関連性がまずあって、それによって会話は開始するとも言えよう。更にまた、どの段階とか、会話のどの場面とかではなく、関連性そのものを問題にしており、それが解明されることによって、あらゆる段階で、会話のあらゆる場面で、どのように関わっているのかがより一層明確になるということの意味していると解釈できよう。

一応便宜上、四つの解釈の可能性を挙げたが、一体どの解釈が最も適したものと言えるであろうか。Griceの思い描く協調の原則と会話の格率に関する構図では、やはり会話の格率の段階で関連性を問題にしていると捉えるべきであろうし、その後もその構図を変更したとは考えられないので、第一の解釈が最も適切であり、それに第四の解釈が加えられると言える。それらを合わ

せて言えることは、心理的な段階での関連性でもなく、協調の原則と同等の段階での関連性でもなく、あくまでも会話の格率の段階で関連性を問題にしているのであるが、会話の格率の中で、関連性の格率がどのように位置付けられるかがはっきりしない限り、各格率が相互にどのように絡み合っているのかが分からず、従ってまず関連性そのものを問題にし、それが解明されることによって、関連性の格率がどの位置を占めるかがはっきりし、そのことで各格率の相互の絡み合いが判明し、そのような会話の格率の全体像が明らかになることで、協調の原則と会話の格率の関係の全体像が明らかにされるということである。それは、単なる心理的な説明を問題にしているのではなく（Griceにとっては、心理的ではなく、理性的な人間行動を問題している）、また会話が関連性のある発話の連続から成るとして、関連性のある発話をするを最高位に位置する会話の一般原則とするのでもなく（関連性の原則としてではなく）、会話を参加者の協調的な作業と捉え、話のやりとりの目的にとって必要な発話をするを最高位に位置する会話の一般原則とし、その協調関係を表す一つの方法として関連性のある発話をするがあり（協調の原則→関連性の格率）、関連性が最初に来るのではなく、あくまでも協調性→関連性の順序であるということの意味している。以上がGriceの思い描く構図であると言えよう。

しかし、別の解釈も可能性としては存在する。例えば、Dascalは、(7)を根拠にして、Griceの協調の原則が実際は関連性の原則であるかのようにしており、第二の解釈に近い解釈をしている<sup>29</sup>。勿論、Grice自身が思い描く構図と他の研究者が解釈するGriceの構図が食い違うことは、別に珍しいことではない。事実、Griceの具体例、(7)、そしてその他の言葉から受ける印象は、第二の解釈に近いものであろう。しかし、そのような印象は別にして、(7)においてGrice自身が意図していることに限定して言えば、話のやりとりの目的にとって必要な発話をする（協調の原則）がまず最初に来て、次にその「必要な発話」が具体的にどのような形を取るのかが問題になり、そこでその「必要な発話」が「必要な情報量の提供」（量の格率）、「真実に基づいた発話」（質の格率）、「関連性のある発話」（関連性の格率）、そして「明瞭な表現」（様態の格率）という具体的な形を持って表される（会話の格率）のであり、しかも少なくともGriceにとっては、「関連性のある発話」以外のものはかなりはっきりしているが、「関連性のある発話」だけが明らかではなく、簡単には解決できない、極めて厄介な難問として残っているのであり、従って「関連性のある発話」の性質、更にそのような発話がなされる発話状況の性質が解明されれば、それ程困難を伴わずに、会話の格率そして協調の原則が正当化されるのであるが、逆に、もしその解明がなされなければ、会話の格率そして協調の原則が正当であることを納得させるのが難しくなるのであって、そのような意味で、「関連性のある発話」の意味内容が解明されるかどうかは、協調の原則と会話の格率という建造物の土台を揺るがす程の重大問題であるということになる。なお、Griceの言う協調の原則と会話の格率の遵守は、協調の原則の遵守と会話の全ての格率の完全な遵守とは異なるもので、特に会話の格率の遵守に関しては、全ての格

率が遵守されるのではなく、全体的な視点から会話の格率というものが遵守されることであって、ある格率が見かけ上、あるいは真に違反されても、会話の格率というものは全体的には遵守されることになるのである。

「関連性」という言葉を何度も使用してきたが、どのような意味内容を持っているのであろうか。それは、Griceにとっての重大問題であり、Grice自身が明確に示すことのできなかったものである。では、どのように推測していけばいいのであろうか。ある人がある事を言い、そして相手の人が別の事を言う時、つながりを説明する為には、二つの発話の間に関連性があるかどうかを判断する基準が必要になるが、単なる時間的な隣接性（ある発話は、その発話の直前あるいは直後の発話と関連性を持つ）だけでは無理であり、別のものを探さなければならない。そこで、協調の原則によれば、話のやりとりの目的にとって必要な発話をしなければならず、関連性の格率によれば、話のやりとりの目的に対して関連性のある発話をしなければならぬのであり、従って協調の原則が遵守されているのであれば、つまり二人が参加している話のやりとりのある共通の目的にとって、その二人の二つの発話が共に必要な発話であるならば、しかもその二つの発話が共にその共通の目的に対して関連性のある発話であるならば、その二つの発話の間には関連性が存在することになると言える。簡単に言えば、関連性のある発話とは、目的に対して関連性を持った発話のことである。そして、関連性があるかどうかの判断は、目的に対して関連性があるかどうかで決まることになる。しかし、Griceは、目的以外に、テーマ (subject)、話題 (topic) なども持ち出すのである。それらを使用すれば、目的に対してだけでなく、テーマ、話題などに対しても関連性があるかどうかを決める必要性が出てくるのである。そして、先に引用した協調の原則のところ (1) では、目的が最初から決められる場合もあり、話のやりとりの中で目的が徐々に現われてくる場合もあり、目的が明確であったり、漠然としていたりする場合もあり、(6) では、一つ一つのやりとりにはそれぞれの目的があり、その後のやりとりには別の目的があり、(5) では、異なる種類の関連性が存在し、関連性の焦点も様々あり、それらが話のやりとりの中で移っていくのであり (Grice自身は説明していないが、例えば、北海道旅行の話をする時、食物、温泉、乗り物、土産品、その他様々なことを話すが、それら全てが北海道旅行に関連があるが、その関連性の中で、関心・注意が向けられる焦点がそれぞれ異なり、その焦点が少しずつ移っていき、またその一つ一つが異なる関連性となり、それが別のもの、更に別のもの、更に別のものという具合に移っていくということであろう)、会話のテーマが変更されたりするのであるとしているのである。一体、どのように解釈すればいいのであろうか。

関連性の問題は、ある発話が別の発話に関連性があるかどうかを判断する問題としてあるが、それら二つの発話とは別の何かを基準にして、その何かに対して関連性があるから、それら二つの発話には関連性があると捉え、その何かは何であるのかを探し求めるところにGriceの意図がある。

例 4 :

A : 「今、何時。」

B 1 : 「3時。」

B 2 : 「子供たちが学校から戻ってきた。」

ここでは、説明を単純にする為に、協調の原則と会話の格率には直接触れないことにする。発話 A と発話 B 1 を見る限り、関連性があることは明らかで、問題にする程のことはないと思われるであろうが、発話 A と発話 B 2 を見ると、そう単純ではないと思われるであろう。というのは、それらの発話だけを見ていると、関連性があるかどうか判断できないからである。それは、A が質問しているのは、現在の時刻であるが、B 2 が答えるのが時刻ではないからである。そこで、現在の時刻を知りたいということに関して言えば、もし子供たちがいつも家に3時に戻ってくることをAとB 2 が知っているのであれば、発話 B 2 は、今が3時であることを伝えていることになり、現在の時刻を知りたいということに対して関連性があることになると言えるし、またもし子供たちが家に戻る時刻がいつも一定しておらず、そして子供たちが家に戻るといつも世話が大変であることをAとB 2 が知っているのであれば、発話 B 2 は、忙しくて質問に答えることができないことを伝えていることになり、現在の時刻を知りたいということに対して関連性がないことになると言える（現在の時刻が分からないことを伝えたり、忙しくて答えられないことを伝える場合でも、発話 A に対して関連性が全くない訳ではないが、ここでは一応除外することにする）。そして、発話 A と発話 B 1 に関しても、同様に、発話 B 1 は、現在の正確な時刻を直接口に出して言っているので、勿論現在の時刻を知りたいということに対して関連性があることになるのである。結局、現在の時刻を知りたいということに対して関連性があるかどうかで、発話 B 1 そして発話 B 2 が発話 A に関連性があるかどうかが決まるのである。

そして、その「何かに対して関連性がある」の中の「何か」に目的、話題などを入れるのが Grice である。しかし、目的、話題などをどのように捉えているのかは、不明瞭である。会話全体、話のやりとり、そして個々の発話のやりとりに区別して言えば（今までそれらの区別を明示することなく使用してきたが、一応ここでは、個々の発話のやりとりが幾つか集まって話のやりとりを成し、話のやりとりが幾つか集まって会話を成すとする。なお、必要がなければ、明確に区別しないで使用することにする。というのは、研究者の間では、話のやりとりと言っている、会話のことを意味していたり、また会話と言っている、話のやりとりを意味していたり、個々の発話のやりとりを意味していたりする例が実に多くあるからである。）、目的に関しては、会話全体に一貫した目的が貫かれるのか、話のやりとり全体に一貫した目的が貫かれるのか、個々の発話のやりとりにおける目的なのか、それらのいずれを意味しているのか、もしそれら全てであるならば、それらの関係はどのようになっているのか、などが不明瞭である。それを話題に当てはめて言えば、会話全体に一貫した話題が貫かれるのか、話のやりとり全体に一貫した話題が

貫かれるのか、個々の発話のやりとりにおける話題なのか、いずれを意味しているのか、もし全てであれば、それらの関係はどうなっているのか、などが不明瞭である。Griceの真の意図がどこにあるのか判断しにくいのである。

では、目的と話題は、どのように捉えていくことができるのであろうか。その手掛かりとして John R. Searleの主張を利用することにする。Searleによれば、「…に関連性がある」という表現は、表面的には「話題に関連性がある」と言うことができるが、話題というのは、話し手と聞き手にとって興味の対象でなければならないという理由で、深層構造から見れば、「目的に関連性がある」となり、しかも目的は必ずある特定の人の目的である為、「聞き手あるいは話し手の目的に関連性がある」となるのである<sup>27)</sup>。その解釈は別にして（Searleの意見を解釈する為には、様々な問題が絡み合ってくるので、ここでは検討しないことにする）、ここでは単純に「話題に関連性がある」が、基本的には「目的に関連性がある」を意味すると捉えることにする。更に、その意味を少し具体的に解釈して、目的が表面に現われる際の具体的な形態が話題であると考え、ある人が心に抱いたある目的を実現する為、ある事を具体的に話題にして話し、相手の人がそれに応えて、その話題に関連性のある発話をする事で、その人の目的に関連性のある発話をする事になるでしょう。ところが、必ずしもそう単純にいくとは限らない。そこで、会話において、目的と話題がどのような関わりを持って現われるのかを見てみることにする（なお、広義に解釈して、日常的な挨拶から授業、討論会などまでを含む談話一般を会話とし、そこで取り上げられる話の材料となるもの全てを話題とすることにする）。まず最初に、個々の発話のやりとりから始めることにする。

例 5 :

A 1 : 「C君の体調はどうなのかな。」

A 2 : 「C君は、きちんと授業に出ているのかい。」

B 1 : 「余り体調はよくないようだ。」

B 2 : 「ここ一二週間、授業で顔を合わしていないよ。」

B 3 : 「アルバイトの方には、全然顔を出していないようだ。」

説明を単純にする為に、上記の全ての発話が発話場面から健康状態に関するものであることをAとBが把握できるものとする。発話A 1と発話B 1の場合、Aは、Cの健康状態を知りたいという目的で、具体的にCの健康状態を話題にして発話A 1をし、Bがそれに応えて、Aの話題に関連性のある発話B 1をし、そのことでAの目的に関連性のある発話をする事になるのである。しかし、いつも必ずそういくとは限らない。発話A 1と発話B 2あるいは発話B 3の場合、第一のケースと同様に、AがCの健康状態を知りたいという目的で、Cの健康状態を直接話題にして発話A 1をするのであるが、Bの方は、健康状態ではなく、授業の出席状況あるいはアルバイトの勤務状況を話題にして発話B 2あるいは発話B 3をし、それによってCの体調が悪いことを伝

えようとしているのであり（発話B 1を間接的に伝えている）、その意味で、Aの目的に関連性のある発話をすることになるのである。発話A 2と発話B 2の場合、Aは、Cの健康状態を知りたいという目的で、直接Cの健康状態ではなく、Cの授業の出席状況を話題にして発話A 2をし（それによってCの体調を聞こうとしているので、発話A 1を間接的に伝えている）、Bがそれに応じて、Aの話題に関連性のある発話B 2をし（それによってCの体調が悪いことを伝えているので、発話B 1を間接的に伝えている）、そのことでAの目的に関連性のある発話をすることになるのである。発話A 2と発話B 3の場合、Aの側は第三のケースと同じであるが、Bの方は、勿論健康状態でもなく、Aが話題として取り上げる授業の出席状況でもなく、Cのアルバイトの勤務状況を話題にして発話B 3をし、それによってCの体調が悪いことを伝えようとしているのであり（発話B 1を間接に伝えている）、その意味で、Aの目的に関連性のある発話をすることになるのである。

以上のように、第一のケースでは、AがCの健康状態を知りたいという目的（Cの健康状態に関する情報の入手）で、直接Cの健康状態を話題にして話し、それに応じてBの方も、あくまでもAの話題に関連性のある発話をし、そのことでAの目的に関連性のある発話（Cの健康状態に関する情報の提供）をするようになるので（勿論、Bの側から見れば、Aの質問に返答する時、Bは、Cの健康状態に関する情報提供という目的で、直接Cの健康状態を話題にして話すと言える）、話題が目的に合致し、「話題に関連性のある発話」と「目的に関連性のある発話」の間に差が出てこないのである。そして、Cの健康状態に関する情報交換（Aの側の情報入手とBの側の情報提供）という目的が実際に言葉を通してそのまま具体的に表面に現われ、AとB共にCの健康状態が話題となるのである。しかし、残りのケースでは（第二のケースのAの側は例外であるが）、Aは、Cの健康状態を知りたいという目的を心に抱くが、その目的を実現する為に、直接Cの健康状態を話題にするのではなく、Cの授業の出席状況（アルバイトの勤務状況でも構わないが）を話題にして話し、Bの方も、直接Cの健康状態を話題にするのではなく、Cの授業の出席状況あるいはアルバイトの勤務状況を話題にしなが、しかもAの目的に関連性のある発話をするようになるので、話題と目的が食い違い、合致せず、「話題に関連性のある発話」と「目的に関連性のある発話」の間に差がはっきりと現われてくるのである。では、第一のケースとは異なり、目的を実際に口に出して話題として取り上げないのであるから、目的が表面に現われる具体的な形態が話題であるとは言えないのであろうか。個々の発話のやりとりに限定して言えば、難しいであろう。というのは、Cの健康状態に関する情報交換という目的は、それに内容的に合致する話題としては表面に現われず、内容的には合致しない話題を取り上げて、間接的に示されるからである（あるいは、健康状態以外を直接話題として取り上げているが、実は健康状態を話題にしており、従って間接的に健康状態を話題にしているとか、健康状態以外を話の材料として利用し、健康状態を話題にしているとか言うことも可能であろうし、曖昧な形で、話題が目的に

内容的に合致するかどうかにかかわらず、「目的が表面に現われる具体的な形態が話題である」ことには変わらないとも言えようが）。しかし、実際の発話場面では、一回の発話のやりとりで終わることは極めて稀なことであろうし、現実的には更に個々の発話のやりとりが続き、それが話のやりとりを成し、更に続いて会話を成すことになるのである。従って、むしろ話のやりとりという全体的な関わりの中で見る方が、より明確になるであろう。なお、ここで目的を一般目的（会話全体に一貫した目的）、特殊目的（話のやりとり全体に一貫した目的）、そして個別目的（個々の発話のやりとりにおける目的）に区別し、同様に、話題を一般話題、特殊話題、そして個別話題に区別して見ていくことにする。

話のやりとりに関して言えば、健康状態を話題にして話す場合、その特殊話題が話のやりとりの初めから最後までの一貫した話題であるとしても、その特殊話題は、それを構成する個別話題が全て健康状態に関するものから成ることもあるし（第一のケースの連続体）、それとは反対に、健康状態ではなく、授業の出席状況、アルバイトの勤務状況、その他の健康状態以外の話題から全て成ることもあるし（第三と第四のケースの連続体）、またそれらの混合体してあることもあるのである。しかし、それらに共通して言えることは、例5とは異なり、健康状態の特殊話題は、健康状態に関する情報交換という特殊目的（＝話のやりとりを構成する全ての個々の発話の個別目的）が表面に現われる具体的な形態としてあるということである。ただ個々の発話の段階では、健康状態を個別話題にすることもあれば、健康状態以外を個別話題にすることもあるが、話のやりとり全体とすれば、特殊目的が表面に現われる具体的な形態として特殊話題があることには変わらないのである。例えば、健康状態に関する情報交換を目的にするが、ただ単に一回の発話のやりとりで済ますのではなく（個別目的）、連続して続けていく時（特殊目的）、その目的を実現する為に、たとえその過程で健康状態以外を個別話題にしているとしても、それらの一連の発話を通して、参加者がお互いに特殊目的を認識し合い、特殊目的の実現の為に、いま健康状態が話題（特殊話題）にされていることを認識し合うのである（但し、話のやりとりの冒頭で、特殊目的をはっきりと口に出して言えば、何が特殊話題であるのかは明確であるが、それ以外の場合は、直接言葉ではなく、参加者の相互の認識を通して特殊目的が表面に現われ、具体的に何が特殊話題であるのかが明確になる）。そのように考えれば、健康状態に関する情報交換という個別目的は、授業の出席状況、アルバイトの勤務状況などが個別話題にされることで、実際に言葉を通して個々の発話においてそのまま具体的に表面に現われることはないが、その個別目的が同時に特殊目的である為、健康状態の特殊話題という形で表面に現われることになると言える。言い換えれば、一見ばらばらに見える個々の発話は、たとえそれらの個別話題が互いに異なっているとしても、それらの目的（個別目的＝特殊目的）に基づいて（個別目的＝特殊目的に関連性のある発話であることで）、一つにまとまった話のやりとりを成すのであり（勿論、個別目的≠特殊目的であれば、ばらばらのままである）、個別目的は、たとえ個別に直接話題にされなくても、話のやりとり全体

では具体的に表面に現われ、話題にされるのである。

会話に関しては、日常的な挨拶から討論会、法廷尋問などまで、実に様々な形態が存在しており、それらを一律に処理できるかどうかは疑問である。ここでは、今まで述べてきたことの流れで見ていくことにする。会話には、それを構成する全ての話のやりとりがそれぞれ独立し、特殊目的(=個別目的)は存在するが、会話全体に一貫して貫かれる一般目的が存在しない場合があるが、そのケースには上述したことを当てはめればいいので、一般目的=特殊目的=個別目的のケースを見ることにする。そこで、一般目的が実際に口に出して言われ、発話の中で一般話題が具体的に明らかにされるケース(Griceの言う、目的が最初からはっきりと決められる場合に当たるであろう)、そして一般目的が口に出して言われることはなく、会話の参加者がお互いにその目的を認識し合うことで、その目的が表面に現われ、一般話題が具体的に明らかにされるケース(Griceの言う、目的が徐々に現われてくる場合に当たるであろう)に区別して見ることにする。なお、説明を簡単にする為に、話題が目的に合致するものとする(特殊話題が特殊目的に合致することはすでに述べたが、ここで扱うケースの場合、一般話題も一般目的に合致するのであるが、個々の発話のやりとりにおいては、個別話題が個別目的に合致する場合もあり、合致しない場合もあるので、前者だけを対象にする)。

第一のケースの例として考えられるのは、討論会であろう。例えば、日米貿易摩擦の討論会では、日米貿易摩擦に関する意見交換という一般目的を司会者が冒頭に口に出して言い、日米貿易摩擦が一般話題であることが具体的に明らかにされ、その一般目的を実現する為に、両国の労働条件格差、自動車の輸出入、農産物の輸出入などを特殊話題とし、それぞれの特殊話題の中で、例えば、両国の労働条件格差であれば、具体的に両国の賃金格差、勤務時間格差、福利厚生施設格差などの個別話題を話し合うことになるであろう。そこでは、日米貿易摩擦に関する意見交換という一般目的=特殊目的=個別目的に対して会話の全ての発話に関連性を持つことになる。しかし、別の解釈も可能であろう。というのは、実際に口に出して言われるのは個々の発話だけで、個々の発話のやりとりが集まって話のやりとりを成し、話のやりとりが集まって会話を成す訳で、そこには二層が存在し、単純には処理できないからである。例えば、一般目的とは別に、両国の労働条件格差などに関する意見交換という特殊目的を司会者がその都度口に出して言い、両国の労働条件格差などが特殊話題であることが具体的に明らかにされ、その特殊目的を実現する為に、両国の賃金格差などの個別話題を話し合うことになると思われるのであって、そうであれば、日米貿易摩擦に関する意見交換という一般目的とは別に、両国の労働条件格差などに関する意見交換という特殊目的=個別目的があることになり、結局単純に一般目的=特殊目的=個別目的とは言えないことになり、日米貿易摩擦に関する意見交換という一般目的→(両国の労働条件格差に関する意見交換という特殊目的=個別目的+自動車の輸出入に関する意見交換という特殊目的=個別目的+農産物の輸出入に関する意見交換という特殊目的=個別目的+・・・)と



なるであろう。その点に関しては、第二のケースで更にはっきりする。

第二のケースに関して言えば、例えば、偶然街で友人と会い、いつも気になっている就職の話についてになってしまう場合、ある発話から始まり、それに一連の発話が続いていく内に、二人が特殊目的、そして一般目的を認識し合い、そのことで特殊目的と一般目的が表面に現われ、特殊話題と一般話題が具体的に明らかにされることになるであろう。その場合、二人がたまたま偶然就職の話になってしまう時は、話が進む中で、お互いに特殊目的を認識し合い、更に一般目的を認識し合うことになり（例えば、「最近、A社が新型車を発表したんだって。」から始まる時、それに続く一連の発話が就職の話に向かうのか、それとも新型車の購入の話に向かうのか、いずれも可能である）、一方の人が最初から特殊目的（あるいは、一般目的も）を持って話を始める時は、相手はその特殊目的を認識し、更に二人が一般目的を認識し合うことになるであろう（例えば、一方の人がA社の経営状態を知りたいという特殊目的を持って「A社の最近の営業成績は怎么样了のかな。」から始め、その目的に関連性のある一連の発話が続き、その後就職とは全く関係ない話へと進むのか、それともその人が就職に関する情報の入手という一般目的を持って就職の話へと進むのか、それともその人は一般目的を持っているのではないが、自然に就職の話へと進むのか、いずれも可能であるし、ともかく話が進む内に、二人がそれらの目的を認識し合い、相手も情報の提供だけでなく、情報の入手を望み、結果的に二人の情報交換が行なわれる）。以上のように、第一のケースの一般目的・話題→特殊目的・話題→個別目的・話題とは逆に、個別目的・話題→特殊目的・話題→一般目的・話題となる。具体例を挙げて言えば、A社の経営状態、B社の経営状態、C社の経営状態、その他の会社の経営状態の話が進み、そこで特定の会社の経営状態に関する情報交換という特殊目的が明らかにされ、更に話が進み、特定の会社の所在地に関する情報交換という特殊目的、賃金に関する情報交換という特殊目的などが明らかにされ、その話の進行の中で就職に関する情報交換という一般目的が明らかにされることになり、個々の話のやりとりにおいて特殊目的＝個別目的はその都度明らかにされるが、一般目的とつながるのは後半に至ってからで（あるいは、会話の途中で）、従って特定の会社の経営状態などに関する情報交換という特殊目的＝個別目的は、少なくとも会話の前半の方では、就職に関する情報交換という一般目的とは関係なく存在しており（例えば、株式に関する情報交換という一般目的であるかもしれないであろう）、後半に至って初めてつながるのであるが、前半では全ての発話が特殊目的に関連性があるとされていたのに、後半ではその同じ発話が今度は一般目的に関連性があるとされるのであり、そこにずれが生じ、単純に一般目的＝特殊目的＝個別目的とは言えなくなり、そのずれが第一のケースと比べて特に目立つのは、第一のケースとは反対に、（特殊目的＝個別目的＋特殊目的＝個別目的＋特殊目的＝個別目的＋・・・）→一般目的となるからなのである。結局、第一と第二のケースでは、会話における全ての発話は、一般目的に関連性を持っているが（その意味では、会話全体に一貫した目的が貫かれていると言えよう）、一般目的と特殊目的（＝

個別目的)の間にずれが生じてしまうのである。

以上述べてきたことは、「目的」(参加者がお互いに認め合う共通の目的)を基準にする関連性の説明の可能性の探求である。それは、Grice自身が不明瞭なままに残している「関連性」の意味内容を協調の原則と関連性の格率に添う形で明確にしようとする試みにすぎない。従って、上述したことに正当性があると主張している訳ではなく、あくまでもGriceの主張を発展させ、それによって不明瞭な点を取り除く為の一方法を探り出そうとしただけである。もし「目的」を基準にする関連性の説明が不可能となれば、Griceの主張の土台を崩すことになるであろう。ともかく、Griceは、話題と目的の関係には十分な検討を加えず、単に「目的」の例として情報交換、他人への指図、他人の行動への影響などを挙げるだけで、あとは具体的な個々の発話のやりとりを検討するだけで終わってしまい、具体的に話のやりとりあるいは会話という全体的な視点からの分析は見られないのである。なお、話題と目的に関しては、一般的にそれらが合致するものと捉えているが、それ自体に問題があるかどうかではなく、それをどのように解釈すべきかが問題で、今まで述べてきたことは、その一つの可能性にすぎない。別の可能性としては、例えば、健康状態に関する情報交換という目的が表面に現われる時、健康状態の話題という具体的な形態を取っても、授業の出席状況などの話題という具体的な形態を取っても、それらの話題はその目的に合致していると言え、その意味から言えば、授業の出席状況なども健康状態を話題にしていることには変わりないと解釈することである。更に、別の可能性としては、例えば、「元気ですか。」という発話は、体調を知りたいという目的がそのまま表面に現われたものであり、「きちんと授業に出ていますか。」という発話は、授業の出席状況を知りたいという目的がそのまま表面に現われたものであり、「アルバイトにはきちんと出ていますか。」という発話は、アルバイトの勤務状況を知りたいという目的がそのまま表面に現われたものであり、それらは健康状態を話題にしている訳ではなく、個々の発話において、ただ単に体調、授業の出席状況、アルバイトの勤務状況などを知りたいという目的がそのまま表面に現われて、体調、授業の出席状況、アルバイトの勤務状況などが話題になっているにすぎず、話題と目的は一致すると解釈することである。以上の解釈には全く根拠がないとは言えず、むしろ説得力があると言えるのかもしれない。今まで述べてきたことは、Griceの主張に沿う形で解釈できる一つの可能性を示したにすぎず、あくまでも一つの可能性として、目的と話題をそれぞれ三つに区別することで上述した解釈が可能であることを示したにすぎないのである。

ここで、Griceの具体例を見ることにする。

例6：

現在銀行で働いている友人CについてAとBが話していると仮定して、Cが仕事をきちんとやっているかどうかをAがBに聞き、Bが次のように答える。

Oh quite well, I think; he likes his colleagues, and he hasn't been to prison yet. (「まあ、

何とかやっていると思うよ。同僚を気に入っているしね。それにまだ刑務所には入っていないよ。」)

解説：「また刑務所には入っていないよ。」に関して、Aは次のように推論する。一見Bが関連性の格率に違反しているようであるが、協調の原則は遵守されており、Cが潜在的に不正直な人間であるとBが思っているとAが考えて初めて、その関連性のないことを見かけ上であると分かり、しかもBはAがそのように推論できることを知っているのであり、従ってCが潜在的に不正直な人間であることをBは含意していることになる<sup>28</sup>。

例7：

A：I am out of petrol. (「ガス欠になった。」)

B：There is a garage round the corner. (「その角を曲がったところに自動車修理工場があります。」)

解説：自動車修理工場が営業していて、ガソリンを売っているとBが思わなければ、Bは関連性の格率に違反してしまうので、従って自動車修理工場が営業している（少なくとも、多分営業しているだろう）ことなどをBは含意していることになる<sup>29</sup>。

例8：

A：Smith doesn't seem to have a girlfriend these days. (「スミスには近頃ガールフレンドがいないようだ。」)

B：He has been paying a lot of visits to New York lately. (「最近、彼は何度もニューヨークを訪ねている。」)

ニューヨークにスミスのガールフレンドがいる（あるいは、多分いるだろう）ことをBは含意していることになる。（なお、例7ですでに述べられているので、例8には解説は必要ないとGriceは言う。）<sup>30</sup>

例9：

上流社会のお茶の会で、Aが次のように言う。

Mrs. X is an old bag. (「X夫人は、魅力のない年老いた女よ。」)

ぞっとするような一瞬の沈黙の後、Bが次のように言う。

The weather has been quite delightful this summer, hasn't it? (「今年の夏の天気は、とても気持ちいいじゃないですか。」)

Aの意見に関連性のあることを言うのをBは誰にも分かるようにはっきりと拒絶した。そのことでAの意見は話題にすべきでないこと、そして多分もっと明確に、Aが無礼をしでかしたことをBは含意していることになる。（見かけ上ではなく、真に関連性の格率に違反する例は稀で、その一例と思われるものとして例9を挙げている。）<sup>31</sup>

## 例10 :

ニューヨークとボストンが昨晚停電になったことは一般に知られていると仮定して、Cが昨晚ある特定のテレビ番組を見たかどうかをAがBに聞き、Cがニューヨークにいたことを知っているBが次のように答える。

No, he was in a black-out city. (「いや。彼は停電になった街にいたんだ。」)

「Cはニューヨークにいた。」ではなく、「停電になった街」の方を選ぶことで、より適切な情報、即ちCがそのテレビ番組を見れなかった理由をBは含意しているのである。二つの情報を同時に提供して、例えば、He was in New York, which was blacked out (「彼は停電になったニューヨークにいた。」)と言えるが、情報を追加する為に使う労力に見合うだけの利益があがってこないであろう<sup>92</sup>。

以上の具体例に対するGriceの説明は、上記のように、簡単なものである。そこには協調の原則と会話の格率によって容易に明らかになるという考えがあるのであろうが、含意の内容がどのように確定されるのかが不明瞭であるという批判が生まれる原因は、そこにもあると言えよう。ともかく、例6から例8までは、関連性の格率が見かけ上は違反されているように見えるが、実際は遵守されている例であり、例6で示された推論過程が例7と例8にも適用できるのであろう。例えば、例7と例8において、発話Bは発話Aに関連性がないように見え、一見関連性の格率に違反しているようであるが、BがAに向かって言っている以上、協調の原則が違反されていると考える理由はなく、従ってBが「自動車修理工場が営業していて、ガソリンを売っていて、…」、あるいは「ニューヨークにはスミスのガールフレンドがいる」を含意しているとAは推論し、そのことで実際は発話Bが発話Aに関連性があることが明らかになり、結局関連性の格率は遵守されていることになるのである。話題と目的から言えば、(個別)話題としては二つの発話の間には関連性がないが、Bが「自動車修理工場が営業していて、ガソリンを売っていて、…」、あるいは「ニューヨークにはスミスのガールフレンドがいる」を含意していることをAが推論することで、ガソリンが必要である(更に、その他のこと)、あるいはスミスにガールフレンドがいるかどうかを知りたいというAの(個別)目的には関連性があることが明らかになり、従って発話Bは発話Aに関連性があることになる。そして、話のやりとりの中で見ることで別の解釈も可能となろう。しかし、例7では、ガス欠の話題と自動車修理工場の話題には相違はあるが、話題としては非常に似通っており(二つの話題は重複していると言えよう)、自動車修理工場がガソリンを売っていることを知っていれば、ガス欠と容易に結びつくのであり、含意は存在しないという批判が出てくるのであるが(例えば、「彼は元気ですか。」に対して「今病院に入院しているの。」と返答する場合、体調と病院とは容易に結びつくものであり、同様の例は多数ある)、その点に関しては、例10のところで取り上げることにする。例8では、Greenが言うように(発話Bを「最近、彼は毎週週末になるとニューヨークに車で出掛けている。」に変更しているが)、

Bの含意は、ニューヨークにガールフレンドがいることだけでなく、ニューヨークでの仕事が忙しすぎて、ガールフレンドを作る時間もないこと、ニューヨークにはしたいことが沢山あるので、ガールフレンドの必要性を感じないこと、あるいはその他のことなどであるかもしれないのである<sup>69</sup>。そのように考えれば、含意の内容を確定する為の推論過程が問題になるのであって、SperberとWilsonはその点でGriceを批判し、独自の関連性理論を構築していくのである。

例9と例10は、興味深い問題であると言える。例9は、関連性の格率が真に違反されている例であるが、果たして本当に関連性はないのであろうか。相手の話を急に逸らして別のことを話題にするケースは、日常的によく見られるものであるが、Griceによれば、真に関連性の格率に違反している為、関連性はないが、協調の原則は遵守されているので、「Aの意見は話題にすべきでない。」、更に「Aが無礼をしてかした。」をBが含意していると判断されるのである。もし協調の原則が遵守されているとするならば、そのような含意があるとすれば、X夫人への非難・中傷がAの目的であり、それに対してBがその非難・中傷に不同意を伝えている訳で、話題としては関連性はないが、BはAの目的に関連性のある発話をしていることになり、両者の発話には関連性が存在すると言えるのではなかろうか。特に話題に関して言えば、Aの話題とは関連性がなければいほど効果があるのであって、その結果掛け離れた話題になり、その為に二つの発話の間には全く関連性がないように見えるが、それは目的に関連性のある発話を効果的にする為に起きた結果であろう。例10は、直接的な返答よりも間接的な返答の方が適切で、しかも利益と労力の釣り合いから見て、有益となる例である。直接的返答と間接的返答の関係は、含意の根幹に関わる問題である。つまり、なぜ直接はっきりと言わずに、間接的に遠回しに言う必要があるのかの問題である。例えば、「今日、パーティーに出てくれませんか。」に対して「出られません。」と言えば、勿論失礼であるということはあるが、それ以外にも、相手は出席依頼の拒絶の理由、その他のことが気になり、多分それらのことを聞いてくるであろうが、もし「今日中に済ませなければならぬ仕事があるのです。」と言えば、出席辞退とその理由を伝えることになり、失礼にならない辞退の仕方であると言え、従ってより適切であり、しかも相手の無駄な労力を軽減し、得られる利益を増大されるという意味で、より有益であろう。そのことは、例7のような似通った話題にも言えることである。例えば、「ガス欠になった。」に対して「その角を曲がったところでガソリンが入るよ。」と言えば、もしAの求めているものが、ガソリンだけでなく、車の修理、Bの手助け（動かなくなった車を一緒に押してくれることなど）、その他のこともあるとすれば、適切でないばかりか、失礼にもなる。しかし、「その角を曲がったところに自動車修理工場があります。」と言うことで、たとえAの要求が何であれ、Aが自動車修理工場に行けば、全ての問題が解決できることを伝えることになり、そのことでBが自分では何も手助けできないことを伝えることにもなるのであり、より適切で、より有益な発話となる。従って、似通った話題であっても、相手の要求と完全に一致しない限り（例えば、「ガソリンはどこ

に行けば、手に入りますか。」に対する「その角を曲がったところでガソリンは手に入りますよ。」のように、相手の要求と一致しない限り）、含意は存在し、しかも含意を伴う間接的な言い方が、直接的な明瞭な言い方よりも適切で、有益な場合があるのである。

Griceの具体例に対する説明には不明瞭な点はあるが、重要な示唆が含まれていることは確かである。その示唆をどのように発展させて、話のやりとりあるいは会話の分析に利用できるのかを解明していくことは必要であるが、扱う発話の数が増加すればするほど、関連性を証明するのが困難になるのであって、その意味で言えば、個々の発話のやりとりから明確にしていくことは重要であるが、話のやりとりあるいは会話の中で個々の発話のやりとりを明確にしていくことも同様に重要である。その為には、様々な視点からの分析の可能性を見出すことは不可欠であろう。

### 3 Griceの取組み方に対する批判と新たな取組み方

「関連性」概念に対するGriceの取組み方は、協調の原則と会話の格率に基づくもので、会話の参加者がお互いに受け入れる共通の目的にとって必要な貢献をすべきであり、その貢献の一部としてその共通の目的に関連性のある発話をすべきであるという具合に、「目的に対する関連性」を基準にするものである。その背後には、人間を合目的・理性的行動をするものと捉え、会話はその一つの現われであるという考えがある。それは、ある目的を持ち、その目的に合致する発話、しかも理性に基づく発話を対象にし、逆に、全く目的のない発話、ある目的を持っていても、その目的に合致しない発話、理性的とは判断できない発話などを対象外にすることを意味している。次に、会話の全体的な視点からの分析の必要性を強調し、そこに協調の原則と会話の格率の果たす役割の本来の意義があるのであるが、現実的には個々の発話のやりとりの解明、しかも含意を伴う発話の解明が中心になっているのである。更に、協調の原則を会話における上位原則として、会話の格率を会話における下位原則として位置付け、その会話の格率の一部である関連性の格率として関連性という概念の分析がなされるのである。以上のような制約をまず最初に認識しなければならず、その上で、Griceの取組み方を正当化することはできるであろうし、批判するにしても、部分修正で終えるのか、全面修正までいく必要があるのか、あるいは全面否定で終止符を打つのかに分かれるであろう。

ここで取り上げるのは、Dascalの取組み方、そしてSperberとWilsonの取組み方であるが、Griceと同様に、「関連性」概念と「含意」概念の果たす役割の重要性を力説する点では、捉え方はそれぞれ異なるが、両者とも共通しており、また「注意(attention)」と「刺激(stimulus)」を利用して「関連性」を説明し(刺激に対して注意を払うということから関連性を説明する)、心理的な側面を強調する点でも、両者は共通しているのである。

### 3.1 Dascalの取組み方

“Conversational Relevance” (1976)におけるDascalの主目的は<sup>64</sup>、自ら述べているように、Griceの関連性の格率に関して、より適切な説明の可能性を提示することであり、従って、あくまでも関連性の格率の枠内での修正案を示すことにある。しかし、Dascalによれば、協調の原則自体が協調に関する原則ではなく、むしろ関連性に関する原則であるかのようにGriceが暗に示していると受け取られるとして、その線に沿う形での今後の発展の為にも役立つものであるとしており、その意味では、関連性の格率の枠を超える、協調の原則に取って代る関連性の原則を目指すものと言えるのかもしれない。

DascalのGrice批判の出発点は、Griceの“accepted (local) purpose or direction of a conversation”（「会話ですでに受け入れられている（局所的）目的あるいは方向」）という表現の曖昧さである（なお、Grice自身は、単に目的あるいは方向と言っているだけで、「局所的」という言葉は入っていないが）。つまり、会話の局所的目的（あるいは、方向）と言っても、非常に特定化された情報の要請から、ただ単に会話を続けるだけといった目的の、非常にはっきりしない当てののないようなものまで様々で、一体どのように目的を確定できるのかが曖昧であるということである。更に、Griceの分析における誤りは、少なくともその一部は、会話の一般目的と局所的目的の区別に注意を払わなかったことにあるとしている<sup>65</sup>。Dascalの批判に対しては、上述したように、全く目的のない発話、ある目的を持っていても、その目的に合致しない発話、理性的とは判断できない発話などをGriceは対象外にしている（Grice自身の言葉で言えば、会話に適合しないものとして除外する）と考えられるので、見当違いであるとGriceは思うであろう。しかし、たとえそうであっても、「目的」が明確にされない限り、何が対象で、何が対象外であるのか、何が会話に適合し、何が適合しないのかが決められないであろう。その為に、「目的」を一般目的と局所的目的に区別することは可能であろうが、もし区別するのであれば、すでに述べたように、むしろ一般目的（会話全体に一貫した目的）、特殊目的（話のやりとり全体に一貫した目的）、そして個別目的（個々の発話のやりとりにおける目的）に区別する方が、少なくともGriceの「目的」を明確にする為には、より適していると言えよう（なお、Dascalの局所的目的は、特殊目的あるいは個別目的に当たるのであろう）。しかし、Dascalは、Griceの線に沿って「会話の目的」を追求するのではなく、それに代わって「会話の要求 (conversational demand)」という概念を導入するのである。ところが、両者の区別に関して、明確な説明をしている訳ではないのである。そのような意味もあって、「会話の目的」という概念よりも「会話の要求」という概念の方がより不確かであるとRuth Manorは批判するのである<sup>66</sup>。そこで、まずDascalの主張から離れて、その相違から検討を始めることにする。

関連性を説明する際に、「目的」と「要求」という概念をどのように捉えるかに関しては、同等あるいは類似のものであると捉えることはできるであろうが、本来質的には異なるものである。

最初に、「目的」を特殊目的あるいは一般目的と捉えることにする。例えば、九州旅行に関する情報入手という目的（九州旅行の話を会話全体と考えて一般目的としても構わないし、会話の中の一つの話のやりとりと考えて特殊目的としても構わないが、説明を簡単にする為に、一応特殊目的とすることにする）で、その目的を実現する為に、福岡、長崎、熊本、鹿児島などの各都市に関する様々な事柄を一つ一つ話題（個別話題）にして話す時、全ての発話はその特殊目的に関連性があることになり、個々の発話のやりとりにおいても、例えば、「福岡の物価は、東京の物価と比べてどうなんですか。」と「最近、東京と余り変わりませんよ。」の二つの発話は、九州旅行に関する情報入手という特殊目的に関連性があるということ根拠にして、関連性があることになるが、その発話のやりとりは、それらの発話を見る限りでは、必ずしも九州旅行に関する情報入手に関係する訳ではなく（福岡への転居のためかもしれないし、福岡への単身赴任のためかもしれないし、全国の物価比較のためかもしれないのである）、参加者がお互いにその特殊目的を受け入れている（話の最初であれ、話の途中であれ、話の後半であれ）という前提があって初めて、可能になることであり、従って発話間の関連性は、それらの発話とは別の、それらの外に存在する目的に対しての関連性に基づくものなのである。次に、「目的」を個別目的と捉え、特殊目的と一般目的とは切り離すことにする（上記のように、九州旅行に関する情報入手という特殊目的も、一般目的も存在しないとして）。単に福岡の物価を知りたいという目的で「福岡の物価は、東京の物価と比べてどうなんですか。」と言ひ、その個別目的に関連性のある「最近、東京と余り変わりませんよ。」という発話をし、そのことで二つの発話は、その個別目的に関連性があるということ根拠にして、関連性があることになり、それらの発話を見れば、福岡の物価に関係していることはすぐに理解できるのであるが、たとえ福岡の物価を知りたいという目的で「福岡の物価は、東京の物価と比べてどうなんですか。」と言っても、相手がそれに返答する必要性が必ずしもあるとは言えず（あるいは、「最近、東京と余り変わりませんよ。」という発話は、物価とは全く関係のない気候について言っているのかもしれないのである）、あくまでも協調の原則が遵守されることが前提になることで、つまり単なる「目的」ではなく、「共通の目的」になることで（一方の人の一方的な目的ではなく、参加者がお互いに受け入れている目的になることで）、発話間の関連性が存在することになり、従って二つの発話の内、どちらか一方を見るだけでは、それが共通の目的に関連性があるのかどうか判断できず、個々の一つ一つの発話とは別の、それぞれの外にある共通の目的が存在することで、それに対して関連性があれば、発話間の関連性があることになるのである。

「要求」に関して言えば、ある人にあることをしてほしいから要求する訳で、しかも一般的には発話を通して自らの要求を伝えるのであり（勿論、発話以外にも、身振り手振りなどがある）、相手も要求されるから何らかの反応を示すのである（無視、拒絶なども一種の反応であると言える）。例えば、「福岡の物価は、東京の物価と比べてどうなんですか。」と言う時、東京の物



価との比較で、福岡の物価を知りたいという要求を伝えることになり、相手はそれに対して「最近、東京と余り変わりませんよ。」、「よく分かりません。」、「そんなことに答える必要はない。」、「……」と反応を示せば、二つの発話は、要求と反応という関係が存在する限り、関連性があることになり、更に要求と反応という関係に基づいて、個々の発話のやりとりが繰り返され続けることで、個々の発話が関連性を持ちながら連続していき、結果的に話のやりとりを成し、更に会話を成すことになるのである。そこでは、特殊目的そして一般目的は存在せず、また共通の目的も存在せず、ただ要求が伝えられ、それに対して反応が示され、その要求と反応の関係が繰り返されることで、連鎖を成し、そのことで一連の関連性のある発話の連続体ができることになる。

以上のように、発話間の関連性の説明が、発話とは別の、その外にある「目的に対する関連性」に基づいて可能になるという視点がある一方で、発話自体によってもたらされる要求とそれに対する反応としての発話という「要求-反応」に基づいて可能になるという視点があり、最終的にどちらに正当性があるのかについては論じないことにして、後者にも検討に値する点が多くあることは確かであろう。そして、後者の視点を受け入れるとするならば、「目的に対する関連性」という基準を否定することにつながり、それは協調の原則と会話の格率の土台そのものを揺るがす結果にもつながることになるであろう。例えば、後者の視点では、会話全体の一般目的も、話のやりとり全体の特殊目的も、更に個々の発話のやりとりにおける共通の目的も必要とせず、個々の発話における話し手あるいは聞き手の個別目的が必要なだけで、しかもそれは「要求」に取って代わられてしまうからである。ある意味では、ある人の個別目的が内に組み入れられた形で発話され、その発話によってもたらされるのが要求であると言うことができよう。

では、「要求-反応」という関係に基づく視点に関して、Dascalは具体的にどのように捉え、どのように展開していくのであろうか。そこで、Dascalの主張を調べることにする。「会話」をある文脈(context) C (なお、「文脈」を広義に解釈して、ある事柄の背景や周辺の状況とする)における二人の話し手AとBによる二つの発話から成るものと仮定して、Aの発話がある「会話の要求」をBにもたらし、そしてその文脈CにおけるBの発話は、その要求に対するBの「反応(reaction)」となるとDascalは言う<sup>87)</sup>。つまり、発話間の関連性は、特定の文脈における会話の要求に対する反応の関連性となるのである。以上の主張を可能にさせる為の基盤を成すものとして、まず最初に、関連性に対する心理的説明がなされ、そこで関連性の三つの段階が示されるのである。

- (8): 時間  $t$  において、あるものが主体  $S$  の注意という心理的場の中心あるいは焦点になれば、そのものは  $t$  における  $S$  にとって話題的に関連性のある (topically relevant) ものになる。もし話題的には関連性はないが、それでも  $S$  の注意の場のどこかに存在するのであれば、そのものは  $t$  における  $S$  にとって周辺的に関連性のある (marginally relevant) ものになる。

更に、Sの注意の場の範囲を超えて、いわゆる背景 (background) と呼ばれるような記憶の中に蓄積されたデータが存在し、そのデータはtにおけるSにとって潜在的に関連性のある (potentially relevant) ものになる。そのように話題的関連性、周辺的関連性、そして潜在的関連性の三段階に区別した上で、次のように言う。tにおいてAの発話によってもたらされる会話の要求は、t+1におけるBにとって話題的に関連性のあるものになり、Cにおけるそれ以外のものに対するBの知覚は、Bにとっては単に周辺的に関連性があるにすぎない。そして、話題的に関連性のあるものが、主としてBの意識的な反応を命令する (command) ものであり、しかも発話は意識的な反応のことなので、Bの発話は、Aの発話によってもたらされる要求に対する反応と言えることになる。Bの発話は、またCに対する反応でもあるが、Bの発話が主としてCによって命令されるとは言えないので、あくまでも二次的にすぎない。<sup>88</sup>

以上のDascalの言葉から明らかなように、刺激と注意による心理的説明がその基盤にあるのである。簡単に言えば、人間というものは、様々な刺激の中にいるが、その中で最も強く注意を引くような刺激があり、その刺激に対して関心を抱き、注意を払うのであり、そこに関連性の意味を見出すのである。それを発話の場面に適用して、発話を刺激とすれば、Bにとっては、車の騒音、動物の鳴声、赤ん坊の泣き声、傍にいる人や通りすがりの人の声、その他の実に様々な刺激を受けるが、自分に向かって話しかけてくるAの発話が最も強い刺激であり、関心を抱き、注意を払う中心になるのである。そして、Aの発話は、その発話がなされる時間tにおいて、Bにとって注意の中心になり、次の瞬間t+1においては、単にAの発話ではなく、Aの発話によってもたらされる会話の要求が、Bにとって注意の中心になり、Bにとって話題的に関連性のあるものになるのである (tとt+1の時間的経過によって、注意の中心が発話そのものから要求に移行するとは明確にDascalが言っている訳ではないが、最初に注意を向けるのは、口に出して言われる言葉自体で、次に注意を向けるのが、その言葉によって伝えられる意味であると解釈できよう)。その話題的に関連性のあるAの要求が、それが主な根拠になって、Bの意識的な反応を命令することになるのである。勿論、意識的な反応の中には、発話以外にも、顔の表情、身振り手振り、その他の反応の仕方があるが、発話に対しては、発話で答えるのが最適な反応の仕方と言えよう。そのようなBの発話が、Aの発話によってもたらされる要求に対する反応とみなされるのである。なお、「要求」に対しては、いつも必ず要求するとは限らず、例えば、冗談を言う場合、相手に笑いを要求するのではなく、ただ期待するだけであり、また友人に挨拶する場合、相手に答礼を期待することもない訳で、従って全く反応を要求することもないことがあるとしてManorは批判するのである<sup>89</sup>。それは「要求」を広義に解釈することによって処理できるとも言えるかもしれない。ただ、友人の間での挨拶の場合、「目的」(あくまでも個別目的)を使用する方が有効であると言えるかもしれない。というのは、ある目的を持って、あることを発話する時、

その発話を通して相手に直接反応を要求するという関係ではなく、協調の原則が遵守されることを前提にして、相手はその目的を受け入れることで、共通の目的になり、その共通の目的にとって必要な発話、しかもその共通の目的に関連性のある発話をしなければならないという関係が生まれてくる為、前者では主従関係のような印象を受けるのに対して、後者では対等な関係にあるような印象を受けるからである。

次に、Dascalの主張の基盤を成すものとして挙げられるのは、関連性の二つの概念である。具体的には、「語用論的関連性 (pragmatic relevance)」と「意味論的関連性 (semantic relevance)」である。

(9) : Aの発話によってもたらされる会話の要求をBが正確に同定することは、Aの発話によって実際にもたらされる要求と異なる要求にBが反応することを避ける為に、簡単に言えば、誤解を避ける為に、必要となる。そして、正確に同定された会話の要求に対して、Bが反応することになる。まず言えることは、発話の解釈には幾つかの異なる意味が関わっており、第一に、意味論的意味(例えば、同音異義語(例えば、bankという単語は、土手という意味で使用されているのか、それとも銀行という意味で使用されているのか)、指示物(例えば、heという代名詞は、具体的に誰を指しているのか)など)、第二に、意味論的・語用論的意味(例えば、平叙文、命令文、疑問文、願望文、感嘆文、行為遂行的文などに関わる意味論的力 (semantic force))、そして第三に、語用論的意味(例えば、発語内的力 (illocutionary force)あるいは力 (force) (J.L.Austinの概念「発語内的力」に類似するものとして使用されている)、そしてイントネーション)で、それらの意味を把握することで発話の解釈ができる。別の言い方をすれば、発話の内容(同音異義語、指示物、意味論的力など)と発話の力(発語内的力、イントネーション)があり、発話の内容と力を確定することで発話の解釈ができ、しかもそれらの確定によって会話の要求と反応がそれぞれ決められることになる。そして、反応の力(Bの発話の力)が要求の力(Aの発話の力)に関連性があれば、反応は要求に対して語用論的に関連性があることになり、反応の内容(Bの発話の内容)が要求の内容(Aの発話の内容)に関連性があれば、反応は要求に対して意味論的に関連性があることになる。もし反応の力と内容が全ての点で要求の力と内容に匹敵すれば、反応は全体的に要求を満足させると言え、反応は要求に対して最大限に関連性のある (maximally relevant)ものになり、そこでは含意は全く生まれない。その反対に、もし反応の構成要素の全てが要求に匹敵しなければ、反応は要求に対して完全に関連性のない (totally irrelevant)ものになり、そこでも含意は全く生まれないことになる。その両極端の間で、つまり反応と要求の構成要素の内、あるものは関連性がないが、あるものは関連性がある場合に、含意は生まれることになる。<sup>40</sup>

以上のDascalの言葉で明らかのように、Aの発話の内容と力が確定されることが、会話の要

求の内容と力が確定されることであり、そのAの発話（Aの要求）に対して、Bが発話をし、反応することになるが、その際内容と力に関して、Bの発話がAの発話に関連性があるかどうか、つまりBの反応がAの要求に関連性があるかどうか問題になり、Bの発話のAの発話に対する関連性が、そのままBの反応のAの要求に対する関連性を意味するので、発話とは別の、その外にある目的によって説明するGriceの方法とは異なることになる。結局、発話間の関連性が、発話→目的→発話という関係に基づくGriceの方法によって説明されるのか、それとも要求(発話)→反応(発話)という関係に基づくDascalの方法によって説明されるのか、いずれを正当化するかは別にして、相違がはっきりと浮かび上がってくるのである。そのような方法、それに加えて前述した二次的な役割しか果たさないとされる文脈に対して、Griceの方法では重要な役割を果たす文脈を無視しているとManorは批判し、意味論的関連性、語用論的関連性、そして文脈の関係から関連性を捉えるべきであるとするのである<sup>41)</sup>。勿論、発話とは別の、発話の背後に隠れている話し手の意図する目的を探り出す為には、発話がなされる場面の文脈が重要な鍵を握ることになるが、Dascalにおいても、発話を解釈する際には、当然文脈の把握が必要になるのであって、むしろその相違は、発話の背後に隠れている目的を探り出す為には、その文脈を手掛かりにするしか方法はなく、その意味で、文脈の果たす役割が大きく表面化するのに対して、あくまでも発話のそのものの解釈を通して、発話そのものを直接の検討対象にする為には、文脈の果たす役割が後退することから生じると言えるであろう。ともかく、内容と力を区別することで、内容に関しては、要求（Aの発話）に対する反応（Bの発話）の関連性を意味論的関連性と捉え、力に関しては、それを語用論的関連性と捉えることになり、要求（Aの発話）と反応（Bの発話）のそれぞれの構成要素（内容を構成する要素と力を構成する要素）の内、全て互いに匹敵する関係にあれば、最大限に関連性があるとされ、全てが互いに食い違い、何一つとして匹敵する関係になければ、完全に関連性がないとされ、そして匹敵する関係と匹敵しない関係が混在する場合にのみ、含意が生成されることになるのである。しかし、最大限に関連性のある場合と完全に関連性のない場合に、なぜ含意が生成されないのか、その中間に位置する、関連性と無関連性の混在する場合にだけ、なぜ含意が生成されるのか、それらの点に関しては、必ずしも明確にされているとは言えないのである。

最後に、Dascalは、(8)と(9)に基づいて、含意を発見する為に必要な二つの規則を挙げて、含意の推測過程を締め括るのである。

(10) : (T) Ckeck for topical relevance (話題的関連性の検査)

(M) Ckeck for correct identification of demand (要求の正確な同定の検査)<sup>42)</sup>

上記の規則は、聞き手（そして、話し手）に含意を推測し（演繹する（deducing））のではなく、あくまでも推測する（guessing））、しかも含意を経験に基づいた、体系的な方法で推測する為の手段を提供する。そして、その規則は、要求に対する反応の無関連性の発見を含意の推

測の為の第一段階として有効に利用するものである。Griceも、一見関連性のない発話が含意の存在によって実際は関連性のある発話であることを示しているが、Griceの含意の推論過程では、含意の推論の為の第一段階として組み入れられてはいない。無関連性の判断を第一段階として組み入れることで、含意を見つけ出す方向が示され、そのことで文脈に含まれる無数の要素を全て調べる必要がなくなり、文脈の中のどの要素に焦点を合わせるべきかが明らかになる。その無関連性（あるいは、関連性）の判断の為の手段の一部を提供するのが、語用論的な要素と意味論的な要素である。従って、無関連性の説明がまず最初になされるべきであるという意味で、Griceの会話の格率の内、関連性の格率が上位を占め、その他の格率は下位を占めることになる。<sup>43</sup>

結局、Dascalにとっての含意の推測過程においては、規則TとMを適用しながら、反応が要求に対して関連性があるのか、それとも関連性がないのかを判断することが第一段階を成し、その後含意の探索が始まることになる。勿論、Griceの含意の推論過程においても、要求と反応の関係としてではないが、二つの発話の間で、関連性があるのかどうかは問題にされている。しかし、前述した例6のように、①Bの発話が一見すると関連性がないように思われ、Bが関連性の格率に違反しているようであるが、協調の原則は遵守されており、②Bがあることを含意しているとAが考えて初めて、その関連性のないことが見かけ上であることが分かり、③しかもBはAがそのように推論できることを知っているのであり、④従ってBはあることを含意していることになる<sup>44</sup>、という具合である。つまり、Griceの場合は、②の段階で、含意が存在すると考えて初めて、見かけ上は関連性のないような発話が、実際は関連性のある発話であることが明らかになるのであって、Dascalのように、Aの発話に対してBの発話（要求に対して反応）が関連性があるかどうか最初に判断され、その後含意の探索が始まる訳ではないのである。その意味で、Griceの会話の格率に関して言えば、関連性の格率が最上位に位置し、その他の量、質、様態などの格率は下位を占めることになり、更に会話の格率と同様に、Griceの協調の原則も維持されることになるのであろう。それが少なくとも“Conversational Relevance”（1976）におけるDascalの意図であると言える。しかし、Dascalの主張を発展させれば、Griceの協調の原則と会話の格率の枠を超えることになるであろう。

Dascalの含意の推測過程に関して、(8), (9), そして(10)を要約すれば、次のようになるであろう。

(11) : Aが発話し、それに対してBが発話する場合を考えてみることにする。①もしAの発話がBの注意の中心になれば（Aの発話がBの注意を最も強く引くもので、それ以外の刺激は、それ程強く注意を引かないか、それとも全く存在しない）、Aの発話はBにとって話題的に関連性のあるものになり、もしBの注意の中心になれば、Aの発話は話題的に関連性のないものになる（それでも、Bが発話するのであれば、Bの発話は別の理由によるものとなり、Dascal自身が述べているように、規則Tの適用の結果が否定的な場合、Bの発話の因果的

な要因を見つけ出さなければならないことになる<sup>45)</sup>。次に、Aの発話がBにとって話題的に関連性があれば、Aの発話によってもたらされる会話の要求は、Bにとって話題的に関連性のあることになり、しかも話題的に関連性のあるものは、Bの意識的な反応を要求することになり（例えば、質問-返答）、そこでBが発話をするのであり、結局Bの発話は、Aの発話によってもたらされる要求の反応となるのである。②ところが、話題的関連性によってAの発話とBの発話が要求と反応の関係にあることが分かるのであるが、たとえそうであっても、もしAの会話の要求をBが正確に同定できず、Aの実際に意図した要求とは異なる要求にBが反応するのであれば（誤解に基づく反応）、Bの反応（発話）は関連性のないものになってしまうのである。そこで、Aの要求をBが正確に同定する為には、まずAの要求に関して、意味論的な内容と語用論的な力を確定する必要がある、その上で、Bが反応することになる。③そして、Aの要求に対するBの反応の関連性を判断する際、もし反応の内容が要求の内容に匹敵すれば、意味論的に関連性があることになり、またもし反応の力が要求の力に匹敵すれば、語用論的に関連性があることになるのである。更に、反応と要求のそれぞれの内容と力の構成要素が全て匹敵すれば、最大限に関連性があることになり、含意は生成されず、その反対に、全てが匹敵しなければ、完全に関連性がないことになり、同様に含意は生成されないことになり、含意が生成されるのは、それぞれの構成要素の内、ある要素は関連性があるが（匹敵するが）、他の要素は関連性がない（匹敵しない）場合だけとなるのである。④以上が規則TとMの適用で関連性あるいは無関連性を判断したものである。その次に、含意の生成のケースに関して、規則Mを繰り返し適用しながら、つまり要求の同定→力の確定→内容の確定→含意を繰り返して行いながら、最終的に真の含意に辿りつくことになるのである（Dascalは例を挙げて説明しているが<sup>46)</sup>、含意自体の分析が本稿の目的ではないので、省略することにする）。

(11)がDascalの思い描く含意の推測過程であろう。あるいは、少なくともそう読み取ることができるであろう。もしそうであるとすれば、Aの発話（要求）に対してBの発話（反応）が関連性があるのか、それとも関連性がないのかをAが判断するのは、Griceの含意の推論過程の②において（稀なケースとして、見かけ上ではなく、真に関連性の格率に違反することがあるとしているが、ここでは除くことにする）、そしてDascalの含意の推測過程の①～③（特に、③では、発話全体ではなく、発話の内容と力を構成する要素の内、どの要素が関連性があり、どの要素が関連性がないのかを判断する）においてであり、従って前者では、含意の存在を考えて初めて、関連性があるかどうか判断されるのに対して、後者では、①～③で関連性があるかどうか判断され、その後の④で具体的に含意が何であるのかが確定されることになり、両者の相違がはっきりすることになると言える。しかし、Dascalによれば、④で真の含意に辿りつくまで規則Mを繰り返し適用することになるが（Aの側から見れば、Bが真に何を含意しているのかを確定す

る為に、BがAの要求を正確に同定しているのか、具体的には内容をどのように捉えているのか、更に力をどのように捉えているのかを知らなければならず、従って規則Mを繰り返し適用することになる）、もし②でBがAの要求を正確に同定しているかどうかですでに問題になっているのであれば、④は②に吸収されるのではないであろうか。あるいは、③では、Aの要求とBの反応のそれぞれの内容と力についてすでに確定していなければ、それぞれの構成要素を比較して、関連性のある要素が何であるのか、関連性のない要素が何であるのか判断できず、従って④は③に吸収されるのではなかろうか。それらの点に関しては、Dascal自身は明確な説明を何も与えていないのであるが、多分Dascalの意図は、次のようなものであろう。②でBがAの要求を正確に同定した上で（具体的には、内容と力をきちんと確定した上で）反応を示しているのかをAが判断し、もしBの反応が誤解によるものであれば、その段階でAの含意の推測過程は終わり、もしそうでなければ、次の③の段階へと進むことになる。③では、あくまでも②に基づいて、Aの要求とBの反応のそれぞれの内容と力を構成している要素を比較し、最大限に関連性があったり、完全に関連性がなかったりする場合は、含意は存在しないので、Aの含意の推測過程はそこで終わり、もし関連性のある要素と関連性のない要素が混在する場合は、含意が生成されるので、次の④の段階に進み、④でAがBの真の含意を確定し、Aの含意の推測過程は完結することになるのである。そのように考えるとすれば、④で規則Mを繰り返し適用することは不必要になるであろう。というのは、すでに②と③の段階を経る中で、含意を探索する方向は絞られてきているので、④で規則Mを繰り返し適用するのではなく、むしろ規則Mが繰り返し適用されるのは、②、③、そして④の各段階で規則Mが適用されることを意味すると言えるからである。より正確には、次のように言えるであろう。④で規則Mを繰り返し適用とするのは、Bの真の含意を確定する為には、一回の推測過程で済むとは限らないというDascalの考えによるものであると言え、従って④で規則Mを繰り返し適用するというよりは、むしろ元に戻って、②+③を繰り返すことで、その推測過程の繰り返しにおいて、②と③の段階で規則Mを繰り返し適用することを意味するのであろう。あるいは、次のように言えるかもしれない。規則Mを繰り返し適用するのは、あくまでも②と③の段階で、④では規則Mの適用ではなく、むしろ具体的に文脈との関係で含意の内容を確定することになるであろう（含意の存在は③で確認され、含意の内容は④で確定されるであろうから）。

次に、Griceの場合は、見かけ上は関連性のない発話が実際は関連性のある発話であるとされているが、Dascalの場合は、見かけ上と実際の区別はなく、ただ関連性があるのか、関連性がないのかが問題にされるのである。では、無関連性（あるいは、関連性）の判断は、①～③のどの段階でなされるのであろうか。Dascal自身は明確にしていらないが、(11)がDascalの思い描く全体像であるならば、当然①～③の全ての段階でなされることになってしまうであろう。但し、簡単に規則TとMを適用して無関連性（あるいは、関連性）の判断をするとDascalは言うが、①

は規則Tが適用できる段階であり、②と③は規則Mが適用できる段階であるのであって、当然各段階での判断の仕方は異なってくるであろう。①の段階では、一般的に言えば、AがBに向かって話しかけてくるのであるから、Aの発話はBの注意の中心になり、Bにとって話題的に関連性のあるものと判断できるが、もし「注意」を注意の中心あるいは焦点に限定し、それを話題的関連性とし、それ以外の注意の場にあるものを周辺的関連性とするならば、Aの側にしても、Bの側にしても、話し相手が自分の注意の中心にはなく、むしろ何か別のことを考えたり、何か気にかかっていることがあったり、何か別のことに注意を強く引かれたり、その他の刺激が注意の中心にあり、話し相手は注意の場の周辺に位置することもあるのであって、その場合は、AとBの発話が周辺的関連性になってしまうのであろうか。注意の中心にあるかどうかによって話題的関連性であるのか、周辺的関連性であるのかを判断するのではなく、AとBが話し合う場合、AがBに話しかけることで、AはBの注意を自分の方に向けさせ、Bの方は、自分に話しかけてくるAに注意を向け、そのことでAの発話が自分にとって関連性のある発話になり、またBがAに話しかける時も同様であり、そのように考えて、注意の中心と周辺の区別、それを基にする話題的関連性と周辺的関連性の区別をしないで、簡単に注意によって発話間の関連性を判断する方が、より適していると言えないであろうか。お互いが相手に注意を払って、話したり、聞いたりすれば、それだけで二人の発話には関連性があるとすることはできるであろう。そこで、例えば、相手に注意を払わず、相手の言うことを聞かずに、全く別のことを言う場合（①における無関連性の例）とか、誤解などによる、的はずれの発話をする場合（②における無関連性の例）などは、簡単に関連性のない発話として処理し、そのような処理の為に①と②が必要になるが、①と②の段階では、あくまでも発話間の関連性があるものと前提しても、更にDascalにとっての無関連性（あるいは、関連性）の判断は、あくまでも含意の推測過程の第一段階として位置付けられるもので、①と②における無関連性（あるいは、関連性）の判断が含意の推測には直接結びつくものではなく、③において本来の意味での無関連性（あるいは、関連性）の判断が必要になるのであるから、たとえ①と②で発話間の関連性があると前提しても、問題はないであろうし、そのように考えることができるとすれば、Griceの①で協調の原則が前提にされているのと同様に、(11)の①と②で（規則Tが適用されるのが①であるので、むしろ①のみにする方が適しているであろう）ある種の関連性の原則が前提にされているとすることができるであろう。但し、Dascalがそこまで思い描いているかどうかは、不明であるが。

以上述べたことは別にして、Dascalは次のようなGrice批判するのである。前述したGriceの例7（「ガス欠になった。」に対して、「その角を曲がったところに自動車修理工場があります。」と返答する場合）に対しては、「自動車修理工場」と「ガソリンの販売」の間には、「独身」と「未婚」の関係のように、意味論的にはっきりとした関わりがあることは明らかで、従って含意が生成されないとか、例8（「スミスには近頃ガールフレンドがいないようだ。」に対して、「最



近は、彼は何度もニューヨークを訪ねている。」と返答する場合) に対しては、二つの発話が共に「スマス」に関係しているの、意味論的に多少関わりがあるが、Griceがその含意として「ニューヨークにスマスのガールフレンドがいる。」を主張していることを批判し、会話の要求から判断すれば、むしろ「ニューヨークにはスマスのガールフレンドがいない。」を含意しているという方向で説明すべきであるとか、例9(「X夫人は、魅力のない年老いた女よ。」に対して、「今年の夏の天気は、とても気持ちいいじゃないですか。」と返答する場合) に対しては、意味論的に全く関わりがないので、返答として認めることができないとしているのである<sup>47)</sup>。最初に気付くことは、Austinの「発語内的力」という概念を利用しているとDascalは言うのであるが、「語用論的な力」をDascalが具体的にどのように捉えているのか、明確な説明がなされずに、不明瞭なままに残されていることである。その問題は、ここでは取り上げないことにして、「文脈」を少し見ることにする。Dascalにとっては、文脈の果たす役割が後退していると言えるが、上記のGrice批判にもそのことは表れているのである。すでに述べたので、ここで繰り返すことはしないが、どのような文脈を思い描いて、例7では含意が生成されないとか、例8ではガールフレンドがいることではなく、いないことを含意しているとか、例9では返答になっていないとか、判断しているのであろうか。文脈の捉え方によっては、例7～例9に関して、全く別の説明も十分可能なのである。Dascalにとっては、例えば、bankという単語が、土手を意味するのか、それとも銀行を意味するのか、heという代名詞が、具体的に誰を指しているのか、発話で使用される文が、平叙文、命令文、疑問文、その他なのか、発話の力が、具体的に何を表しているのか、などの問題を解決する為には、当然発話がなされる文脈が明確にされなければならないが、そのような発話の内容と力を確定する為に必要な限りにおいて、文脈が関わっており、その限りにおいて、文脈が役割を果たすのである。それは、規則TとMを適用することで、(1)のように、①-②-③という過程を経る中で、文脈に含まれる無数の要素の内、対象にすべき要素が絞られていき、具体的に何に焦点をあわせるべきかが明確になるという確信があるからである。しかし、たとえ意味論的に発話の内容が確定されても、その内容とは全く異なることを含意することは可能であり(例えば、例8においては、発話される文脈によって、ガールフレンドがいることも、いないことも、いずれも含意することはできるし、例9においては、二つの発話の内容が意味論的に全く異なっても、その内容とは全く異なることを含意し、そのことで返答になるような文脈は考えられる)、その為にはDascalが不明瞭なままに残している語用論的側面の解明が必要となり、従って文脈の解明がより重要になるのである(文脈依存度は、発話の内容よりも発話の力の方が大きいのである)。勿論、文脈に含まれる無数とも言える、様々な要素を全て対象にすべきであるというのではなく、それを絞り込む過程で、特に語用論的側面を解明する為、文脈の果たす役割が極めて重要であるということである。事実、“Why did John beat Mary”(「ジョンは、なぜメアリーを打ったんですか。」)に対する“What is the solution

to Fermat's problem”(「フェルマーの問題に対して、どんな解決がありますか。)」をDascalが例として挙げており、二つの発話の内容は全く関わりを持っていないが、「その質問には答えることができません。」を含意しているとしているのである<sup>48</sup>。しかし、残念ながら、どのような文脈なのかに関しては、全く説明がないのである。ともかく、語用論的側面の解明の為には、文脈の解明が不可欠であり、そこに文脈の果たす重要な役割があるのであるが、その点に関しては、明確にされないままであり、その意味で、Dascalにとっての文脈の果たす役割が後退していると言えるし、結局その為に、なぜ含意が生成されないのか、なぜ含意が生成されるのか、含意の内容が具体的にどのように確定されるのか、それらについて必ずしも明確にされているとは言えないのである（一例として、例7に関して、なぜGriceが含意の存在を主張するのに対して、Dascalが含意の存在を否定するのか）。但し、Dascalが文脈の果たす役割を無視している訳ではなく、むしろ重視していると言え、ただDascalの文脈の扱い方が、結果的に後退しているように見せてしまっていると言えよう。

Dascalの主張を検討してきたが、不明瞭な点や問題点もあるが、特に刺激－注意の関係による関連性の説明、そして要求－反応の関係による関連性の説明は、Griceの主張には見られない特徴であり、一般目的、特殊目的、そして共通の目的に依存することなく、関連性を説明する点で、評価されるべきものであろう。そして、刺激－注意の関係にしても、要求－反応の関係にしても、基本的には個々の発話のやりとりの段階での問題であり、個々の発話のやりとりが続いて、話のやりとりを成し、更に会話を成す場合においても、それらの関係で説明されることになるが、会話の様々な形態を全体的に解明する上で、どこまで有効であるのかが問題になるのであり、また逆に、その会話全体の解明での有効性が、刺激－注意の関係と要求－反応の関係を正確に評価する為の判断材料になるであろう。

### 3.2 SperberとWilsonの取組み方

「関連性」概念に対するGriceの取組み方は、「目的に対する関連性」を基準にするものに対して、Dascalの取組み方は、「刺激－注意」の関係と「要求－反応」の関係を基準にするものである。しかし、Dascalにとっては、二つの発話の間に（話題的）関連性があるかどうか、含意の推測過程の第一段階として絶えず問題になり、その意味では、Griceの延長線上に位置していると言えるであろうし、またDascalの取組み方を全体的な視点からみても、Griceによって設けられた枠を超えて、自らの主張を更に徹底させて、「関連性」を会話において最高位に位置する一般原則（簡単に言えば、関連性の原則）として捉えるまでには至っていないのである。勿論、しばしば疑問視される会話の目的（一般目的、特殊目的、そして共通の目的）の存在は、取り除かれるのであるが。ところが、SperberとWilsonの取組み方は、Dascalと同様に、Griceの主張から出発し、しかも「刺激－注意」の関係に基づく関連性の心理的な説明をするの

であるが、その心理的説明をDascalより更に徹底させ、最終的にはGriceによって設けられた枠を遥かに超して、結局「関連性」を会話において最高位に位置する一般原則として捉えるまでに至り、その関連性の原則に基づいて、二つの発話の間に関連性があるかどうかは問題にされず、関連性があるという前提の下で、関連性の具体的な分析が行なわれるのである。但し、あくまでも個々の発話のやりとりが分析対象になり、話のやりとり、更に会話は、その個々の発話のやりとりの単なる延長線上にあるものとして捉えている点では、Dascalと共通しているが。

SperberとWilsonは、自らの考えを多くの論文・著書の中で、例えば、“Mutual Knowledge and Relevance in Theories of Comprehension” (1982), “Inference and Implicature” (1986), “On Defining Relevance” (1986), *Relevance* (1986), “Representation and Relevance” (1988) などの中で、繰り返し表明しており、基本的な考えは変わらないのであるが、多少の変更が見られるのである。そこで、基本的な考えが最も明確に表されている*Relevance* (1986) を主として検討することにする。

まず最初に、刺激と注意に基づく関連性の説明から見ることにする。例えば、メアリーとピーターが公園のベンチに座っている時に、ピーターが体を後にそらし、その体の動きによってメアリーの視界が変わり、アイスクリーム売り（メアリーがベンチに座った時に、すでに気が付いていた人物）、散歩をしている普通の人（メアリーが今まで一度も会ったことのない人物）、そしてメアリーの知り合いのウィリアム（ひどく退屈な人物で、二人の方に近づいてくる）の三人がメアリーの目に入るとする。そこで、メアリーは、ピーターの行動に注意を払い、ピーターが単に楽な姿勢をとろうとしている時よりも、もっとごちなく体を後にそらしているであろうという理由で、彼の行動を意図的であったに違いないと結論付けることになる。つまり、メアリーの注意をある特定の現象に向けさせる為に、ピーターが体を後にそらしているとメアリーは考える。そのようなピーターの意図的な行動を意図明示的行動 (ostensive behaviour)、あるいは簡単に意図明示 (ostension) と呼ぶことができる。そして、主張の場合に、間違えたり、嘘を言ったりすることがあり得ると同様に、意図明示的行動の場合も、間違えたり、相手の注意を関連性のある情報からそらそうとすることはあり得るが、主張には暗黙のうちに真実が保証されていると同様に、意図明示的行動にも暗黙のうちに関連性が保証されていると言える。そのような関連性の保証に基づいて、次のような推論過程が可能になる。メアリーは、ピーターの行動に気付き、彼の行動が意図明示的であること、つまり彼女の注意をある現象に引き付けようと意図していると考え。ピーターの関連性の保証に十分信頼が持てるのであれば、メアリーは、彼の行動によって明らかにされる情報の一部が本当に彼女にとって関連性があるものだと推論するであろう。更に、メアリーは、ピーターが体を後にそらすことによって彼女の視界に入るようになった方向に注意を向け、そしてアイスクリーム売り、散歩をしている人、ウィリアムなどを発見する。その中で、ウィリアムに関する想定のみが、メアリーが注意を払うだけの価値のある関連性

を持った、新たに明らかにされた想定ということになる。そのことから、ピーターの意図がメアリーの注意をウィリアムが近づいてくることに向けさせることであったとメアリーは推論できる。ピーターの意図明示的行動に関する他の想定は、関連性が保証されているとメアリーが確信できないものである。結局、意図明示的行動が成功するのは、その行動が関連性の保証を含意するからであり、その関連性の保証を含意するのは、人間は自動的に自分に最も関連性があると思われるものに自分の注意を向けるからである。意図明示的行動が関連性の保証を伴うことを関連性の原則と呼ぶことができる<sup>49</sup>。

また、次のような言い方をしている。意図明示的刺激（例えば、発話）とは、聴衆の注意を引くものでなければならないと同時に、その注意を伝達者の意図に集中させるものでなければならないし、更に伝達者の意図を明らかにさせるものでなければならない。その為には、意図明示的刺激が聴衆にとって注意に値するだけの関連性を持っていなければならない。従って、意図明示的な伝達者は、自分の使用する意図明示的刺激が聴衆にとって関連性があることを必然的に伝達するのであり、言い換えれば、意図明示的伝達行為は、自動的に関連性の見込み（presumption of relevance）を伝達することになり、それが関連性の原則となる<sup>50</sup>。そして、*Relevance*（1986）においてだけでなく、他の論文においても、例えば、“Representation and Relevance”（1988）においても、同様の主張が見られる。伝達するとは、ある人の注意を求め、その人の労力の消費を求めるものなので、もし効果の点で、その人にとって十分関連性があるような情報を手に入れることが期待できなければ、注意を払うことはしないであろうから、伝達するとは、使用される刺激（例えば、発話）が聴衆の注意に値するものであることを含意することになり、従ってある人になされる発話は、その発話自体の関連性を見込みを自動的に伝えることになり、それが関連性の原則と呼ばれるものである<sup>51</sup>。

上記のことから明らかなように、認知心理学に基づいて関連性を理論化しようと試みる、従って心理的特性としての関連性に興味を抱く Sperber と Wilson は、関連性の原則の存在理由について刺激—注意の関係に基づく心理的説明を行なうのである。つまり、意図明示的伝達を前提に、伝達者が意図明示的刺激（ウィリアムが近づいてくるのをメアリーに見せようという意図で、ピーターが体を後にそらす動作もその例であるが、典型的な例としては、叫び声や玄関のベルのような聴覚的刺激、手や光などによる合図のような視覚的刺激、突いたり、つかんだりするような触覚的刺激などがあるが、最も重要なのが発話である<sup>52</sup>）を使用して、聴衆にあることを伝えようと意図する時、自分の意図を聴衆に把握させなければならないが、その為にはその意図明示的刺激が聴衆の注意を引くものでなければならず、聴衆の注意を引くだけの価値があるようにする為には、自分に最も関連性のあるものに注意を向け、関心を抱くという人間の心理から言えば、その意図明示的刺激が聴衆にとって関連性のあるものでなければならないことになり（様々な可能な刺激の範囲の中から、伝達者は最も関連性のある刺激を選ばなければならない）、その意

味で、伝達者は意図明示的伝達行為を首尾よく遂行する為に、関連性の見込み（関連性の保証）を伝達することになり、それが関連性の原則と言えるものであり、従って聴衆の側から見れば、伝達者からの刺激が意図明示的であることに気付けば、それが聴衆にとって関連性のある刺激であると推論でき、その刺激の関連性が存在すると考えるからこそ、聴衆はその刺激に注意を向け、そしてその刺激を使用する伝達者の意図に注意を向け、最終的に伝達者の意図を推論することになるのである。そして、発話に関して簡単に言えば、意図明示的伝達と関連性の原則を前提にして（伝達が意図明示的であることは、同時に関連性のある発話による伝達のこととなる）、話し手が自分の意図を聞き手に把握させる為に、聞き手の注意を引くに値するだけの関連性のある発話をする事になり、聞き手はその発話を関連性のある発話であると推論し、話し手の発話に注意を向けるだけでなく、その発話によって伝えられる話し手の意図に注意を向け、そこで話し手の意図を推論することになるのである。

しかし、たとえどのような刺激であれ、私達はまずその刺激に注意を向けるのであり、ただその刺激が自分に意図されたものでないことが分かれば、そこで終わり、それ以上には進まないだけであって、その刺激が意図明示的であれば、単にその刺激そのものに注意を向けるだけでなく、その刺激を使用する伝達者の意図にまで注意を向けて、伝達者の意図が何であるのかを推論し、そして把握しようとするのである。発話に関しても同様で、たとえどのような発話であっても、私達はまずその発話に注意を向けて聞くのが普通で（関心を抱くかどうかは別にして）、その上でそれが自分に対して意図された発話でないことが分かれば、そこで終わることになるが、もし自分に対して意図された発話であれば、注意を更に相手の意図にまで向けて、相手の意図を推論することによって把握しようとするのである。もしそうであれば、単なる刺激と意図明示的刺激は区別して考える必要があり（いずれの場合も、注意を向けることには変わらない）、その区別に従えば、前述したDascalの刺激－注意の関係は前者を中心にするものである（あらゆる刺激が対象になるが、ただ自分に話しかけてくる発話は、聞き手の注意の中心になって、話題的に関連性があるという意味で、特に重要になる）のに対して、SperberとWilsonの刺激－注意の関係は後者を中心にするものである（あくまでも意図明示的刺激が対象で、その中で特に重要なのが発話ということであって、意図明示的以外の、単なる刺激の例としては考えられていない）と言うことができよう。

そこで、会話におけるテーマの変更を例として挙げれば、刺激と関連性に対する捉え方の相違は、次のようになるであろう。まず最初に、比較の為に、前述したGriceの説明をここで再び述べておくことにする。Griceによれば、「X夫人は、魅力のない年老いた女よ。」というAの発話に対して、Bが「今年の夏の天気は、とても気持ちいいじゃないですか。」と言う場合、Aの意見に関連性のあることを言うのをBは誰にも分かるようにはっきり拒絶したことになり（真に関連性のない発話をしたことになり）、従って真に関連性の格率に違反しているという意

味で、関連性がないことになるが、それでも協調の原則は遵守されているので、「Aの意見は話題にすべきでない。」、更に「Aが無礼をしでかした。」をBが含意していることになる。簡単に言えば、テーマの変更の場合、関連性は全く存在しないが（関連性の格率の違反）、含意は存在することになるのである（協調の原則の遵守）。しかし、SperberとWilsonによれば、たとえ関連性のない発話であっても、話し手が関連性のない発話を自ら選んだのであれば、話し手が自ら選んで、関連性のない発話をしたという事実は、それ自体として関連性があり（例えば、関連性のない発話をする中で、テーマの変更を望む場合、その願望は関連性があることになる）、従って関連性のない発話をするによっても関連性が達成される場合もあることになる<sup>53</sup>。そうであるとすれば、意図明示的伝達が前提にされている限り、つまり相手にあることを伝達する意図で発話する限り、関連性のない発話であっても、関連性の原則という前提に反することには必ずしもならないことになるのである。また、“Inference and Implicature”においても、Griceを批判して、Bの発話の内容を通してではなく、Bが故意にAの意見を無視しているという事実に聞き手の注意を向けさせることによって関連性は得られ、そこに含意の存在意義があるとしているように<sup>54</sup>、同様の主張が見られる。結局、発話が意図明示的刺激である限り、たとえ関連性のない発話（“Inference and Implicature”では、発話の内容が関連性のないものとされるのに対して、*Relevance*では、発話によって明示的に表されている想定が関連性のないものとされているが、ここでは簡単に関連性のない発話としておくことにする）であっても、話し手が伝達意図を持って発話したという事実があり、その事実に聞き手の注意を向けさせるだけの関連性があることになるのである。従って、テーマの変更の場合、関連性のない発話をするという点では、Griceと一致するが、関連性が存在するとしている点で、Griceと異なってくるのである（また、含意の存在でも一致するが、関連性の格率の真の違反があっても、あくまでも協調の原則の遵守によって含意の存在を説明するのに対して、あくまでも関連性の原則によって説明するという相違が存在する）。

発話が単なる刺激ではなく、意図明示的刺激である限り、関連性のある発話は勿論のこと、たとえ関連性のない発話であっても、関連性は存在するとSperberとWilsonは主張するが、Dascalはどのように主張するのであろうか。SocratesとMenoが会話をしている時に、突然雨が降り出す場合、それまでの会話の要求に取って代って、雨という新たな刺激が二人にとっての話題になり、その雨によってもたらされる非会話的な要求（発話によってもたらされる会話の要求とは明確に区別される、発話以外の刺激によってもたらされる非会話的な要求のこと）に対する反応として“The weather has been so nice these days”（「近頃はずっと天気が大変良かったのに。」）と発話することは適切であり、関連性があるが、含意を生み出すことはないと言われ、以上がテーマの変更の例とされるのであるが、もし雨という会話を中断させるような妨害をはっきりと意図的に無視して、Menoがあくまでもそれ以前の会話の要求に対して関連性のある反応

として発話する場合は、雨という妨害をはっきりと意図的に無視するという事実によって含意は生み出されることになることとされ（二人の会話に割り込もうとする第三者の発話による妨害も同様であるとされている）、例えば、“You see, Socrates, I am so interested in talking with you that I don't care about getting wet”（「ねえ、Socrates、分かるだろう。君と話す方がもっと興味があるので、雨に濡れても構わないよ。」）を含意することになり、以上はテーマの変更ではないとされるのである<sup>59</sup>。結局、会話の途中で突然雨が降りだす場合、雨（新たな刺激）が話題になり、その雨によってもたらされる非会話的な要求に対して「近頃はずっと天気が大変良かったのに。」と発話すれば、あくまでも雨によってもたらされる非会話的な要求に対しては関連性のある発話になるが（それ以前の発話によってもたらされる会話の要求に対しては関連性のない発話になるが）、含意は生み出されないことになり、それとは反対に、雨という会話を中断させる妨害をはっきりと意図的に無視して、会話を続けていく意図で、あくまでもそれ以前の発話（それ以前の刺激）によってもたらされる会話の要求に対する反応として発話すれば、関連性のある発話になり、そこに含意が生み出されることになるのであって、Dascalにとっては、テーマの変更（前者のケース）の場合、関連性のある発話がなされ、関連性が存在することになるが、含意は存在しないことになるのである。但し、Grice、そしてSperberとWilsonとは異なる例をDascalが使用しているので（発話－発話の関係と発話以外の刺激（雨）－発話の関係の相違）、同様に扱うことはできないが。では、Griceの例は、どのように説明されるのであろうか。Dascal自身は、Aの発話に対して、Bの発話は返答になっていないとして簡単に片付けてしまっているのである。もしそのことによって、Bの発話が関連性のない発話であり、そこには関連性が全く存在せず、更に含意も全く存在しないということの意味しているのであれば、奇妙な結果になってしまうであろう。次のように解釈することはできないのであろうか。例えば、発話であれ、それ以外の刺激であれ、ある刺激が注意の中心になれば、話題的に関連性のあるものになるとDascalが主張している訳で、その意味で、関連性のある発話がなされ、関連性が存在することになるとし、また雨の例とは異なり、含意が存在しないとするのは無理であろうから、含意も存在することになるとすることはできないのであろうか。ともかく、Griceの例のみならず、発話－発話の関係にある全てのテーマの変更の例にも同様の解釈をするのか、それともGriceの例は別にして、その他の発話－発話の関係にあるテーマの変更の例には今述べた解釈が可能であるとするのか、どちらであるのかははっきりしないのである。

以上のように、Dascalの主張の特徴は、SperberとWilsonのように、意図明示的の刺激（発話など）だけでなく、より広範囲に及ぶ単なる刺激までも対象にしていることで、実際の会話が様々な外的要因（例えば、雨、地震、動物の鳴声、自動車の急ブレーキ、その他の様々な刺激）で中断され、それ以前に話題にされていたものとは異なるものが話題にされることがよくあることを考えれば、その意義は十分認められるであろう。勿論、SperberとWilsonの主張についても、

意図明示的刺激を対象にすることで、単に発話だけでなく、伝達意図を持ってなされる聴覚的刺激、視覚的刺激、触覚的刺激なども対象にすることができるのであるから、言語伝達のみならず、伝達一般の理論化にとっても大いにその意義は認められるであろう。いずれの場合であれ、Griceの取り組む対象よりも広範囲であることには変わりなく、そこに利点を見い出すことができるのである。そして、会話におけるテーマの変更の場合、Griceの関連性のない発話－関連性の非存在－含意の存在という関係は、単なる刺激と関連性の関係から捉えるDascalによって、関連性のある発話－関連性の存在－含意の非存在（あくまでも発話以外の刺激（雨）－発話の関係の場合）とされ、意図明示的刺激と関連性の関係から捉えるSperberとWilsonによって、関連性のない発話－関連性の存在－含意の存在とされることになるのである。

次に、SperberとWilsonによるGrice批判を見ることにする。SperberとWilsonによれば、関連性の原則はGriceの協調の原則と会話の格率と多くの点で異なることになる<sup>69</sup>。第一に、Griceの協調の原則と会話の格率と比較すれば、SperberとWilsonの関連性の原則の方が遥かに明確であるとしている。すでに検討したように、協調の原則と会話の格率（特に、関連性の格率）には多くの曖昧な点が含まれており、その曖昧さに対する批判が多くあることは事実であり、また関連性の原則（特に、関連性の定義）の方がより明確にされていることも事実である。第二に、SperberとWilsonが考えている伝達以上のことをGriceが伝達に対して要求しているとしている。例えば、前者の場合、伝達者と聴衆が持たなければならない目的とは、単に伝達を首尾よく達成することだけにすぎないが、後者の場合は、伝達を首尾よく達成すること以外に、伝達には共通の目的あるいは相互に受け入れられている方向がなければならないという具合に、伝達にとって必要な協調の程度が大きくなってしまっているとしている。それに対する批判の理由として、提供し得る情報を私達が望む通りに全て提供しない人がいても、非難されるべきではあるが、決して伝達の原則に違反している訳ではなく、従ってGriceが思い描く協調の程度が伝達者にいつも期待されているとは限らないことが挙げられている。勿論、Griceにしても、SperberとWilsonと同様に、伝達を首尾よく達成することを目的にしていることには変わりがないのであって、ただ伝達を単に首尾よく達成するだけでなく、欠陥なく達成することを目的にしていることに問題があると言えよう。そこで、特に問題になるのは、Griceの「目的」に対する捉え方である。一体、会話全体に一貫した目的（一般目的）なのか、話のやりとり全体に一貫した目的（特殊目的）なのか、個々の発話のやりとりにおける共通の目的（個別の共通目的）なのか、個々の発話のやりとりにおける発話者個人の目的（個別目的）なのか、どの目的を意味しているのかが曖昧なのである。Grice自身は、一般目的あるいは特殊目的を目指しているようであるが、実際の具体例の分析では、むしろ個別の共通目的あるいは個別目的を目指していると解釈できるのであり、もしそのように解釈するのであれば、SperberとWilsonのGrice批判は、必ずしも的を得ているとは言えないのではなかろうか。それに加えて、Griceの理論が「会話」の理論として提唱されて



いるが、いつも言語伝達の一般理論として解釈されており、その意味で、Griceの主張は会話に関しては正当性があることを否定するつもりはないが、言語伝達の一般理論としては欠陥があるとしてSperberとWilsonは批判するのであるが<sup>67</sup>、Griceの理論の解釈は別にして、会話の理論であれ、言語伝達の理論であれ、いずれの場合でも、「目的」に対する捉え方に問題があるのであって、従って会話に関しても決して正当性があるとは言えないのではなかろうか。第三に、Griceの協調の原則と会話の格率は、伝達者と聴衆が適切に伝達する為に知っていなければならない規範であり、伝達者が遵守したり、違反したりする規範であるのに対して、SperberとWilsonの関連性の原則は、意図明示的・推論的伝達の一般化にすぎず、子供を作るのに遺伝学の原則を知っている必要がないのと同様に、伝達者と聴衆が伝達する為に関連性の原則を知っている必要はないし、伝達者にとっては、関連性の原則を遵守したり、違反したりするものではなく、全ての意図明示的伝達行為が関連性の見込みを伝達するので、関連性の原則は例外なく適用されるものであり、また聴衆にとっても、推論的把握の際に利用するのは、関連性の原則という一般原則ではなく、ある特定の関連性の見込みがある特定の伝達行為によって伝達されたという事実なのであるとしている。そして、関連性理論の初期段階では、Griceの主張と類似した面があったこと、例えば、伝達者と聴衆は関連性の原則の知識を持ち、それを利用すると考えたことがあったが、関連性の原則が例外なく適用されるという考えは最初からあったとSperberとWilsonは付け加えるのである<sup>68</sup>。事実、例えば、“Inference and Implicature”（1986）では、「関連性の原則の遵守」という表現が何度も使用されており、関連性の原則が例外なく適用されることを主張はしているが、関連性の原則の知識を持たなければならないし、それを利用しなければならないという印象が前面に出ているのであり、その意味から言えば、Griceの協調の原則と類似した面があるのである（会話の格率は別にして、協調の原則は絶えず遵守されなければならないものであり、例外なく適用されるものなのである）。ともかく、Griceの協調の原則とSperberとWilsonの関連性の原則の相違は、非常に興味深いものであると言える。というのは、Griceにとっては、人間の合目的・理性的行動の一種として会話（あるいは、伝達）が捉えられており、あくまでも「理性的な（rational）」側面が強調され（従って、単に「首尾よく」だけでなく、「欠陥なく」伝達を達成することを意味すると言える）、実際の会話の場面に即して一般化するのではなく、むしろ理想的な形での原則（会話の参加者が全員遵守しなければならない原則）として協調の原則があるのに対して、SperberとWilsonにとっては、人間の現実的な伝達形態として伝達が捉えられており、あくまでも「妥当的な（reasonable）」側面が強調され（従って、「首尾よく」伝達を達成することを意味すると言える）、実際の伝達の場面に即して一般化されるものとして関連性の原則があると言えるからである。そして、その相違が原則の適用範囲の違いを生み出すことになるのである（前者では、適用範囲がかなり制限されるのに対して、後者では、その範囲が広く、かなり緩やかになる）。最後に、Griceの会話に関する説明

は、含意を伴う伝達と含意を伴わない伝達の区別から始まるが、結果的には前者のみで終わり、含意を伴わない、明示的な伝達の説明がなされずに残されているが、SperberとWilsonの説明では、それら両者を含む、意図明示的伝達全般が対象にされているとしている。それは事実であるが、すでに検討したので、ここでは繰り返すことはしないが、Griceの理論が持つ制約（含意の解明がGriceの中心課題である為）を単なる欠点として批判するのか、それともその制約を認識した上で、妥当性があるかどうかを問題にするのか、いずれを選択すべきかが重要となろう。

では、「関連性」概念に対するSperberとWilsonの取組み方は、具体的にどのようなものであろうか。Griceの理論では、協調の原則（最高位に位置する会話の原則）に基づいて生み出される会話の格率（協調の原則の下位に位置する会話の原則）の中の一部にすぎない関連性の格率として「関連性」が説明され、しかもその関連性の格率に関しては、ごく簡単に「関連性を持たせなさい。」と述べられているにすぎないのである。それに対して、SperberとWilsonの理論では、伝達一般に関する単一の一般原則としてある関連性の原則が、Griceの協調の原則と会話の格率に取って代るものであり、その関連性の原則によって「関連性」が説明されることになるのである。そこで、関連性の原則から見ていくことにする。

(12) : "Mutual Knowledge and Relevance in Theories of Comprehension" (1982) (簡単にMRとする)<sup>69</sup>

The speaker tries to express the proposition which is the most relevant one possible to the hearer.

(話し手は最も関連性の高い可能性がある命題を聞き手に表そうと努力する。)

(13) : "Inference and Implicature" (1986) (簡単にIIとする)<sup>60</sup>

the speaker tries to be as relevant as possible in the circumstances

(話し手はその状況の下で出来る限り関連性を持たせるように努力する。)

(14) : "On Defining Relevance" (1986) (簡単にDRとする)<sup>61</sup>

Try to be as relevant as is possible in the circumstances

(その状況の下で出来る限り関連性を持たせるように努力しなさい。)

(15) : *Relevance* (1986) (簡単にRとする)<sup>62</sup>

Every act of ostensive communication communicates the presumption of its own optimal relevance.

(全ての意図明示的伝達行為はその行為自体の最適な関連性を見込みを伝達する。)

Presumption of optimal relevance (最適な関連性を見込み)

(a) The set of assumptions { I } which the communicator intends to make manifest to the addressee is relevant enough to make it worth the addressee's while to process the ostensive stimulus.

(伝達者が受け手に明らかにしようと意図する想定集合{I}は、受け手が時間を割いてその意図明示的の刺激を処理するだけの価値が十分あるような関連性を持つ。)

- (b) The ostensive stimulus is the most relevant one the communicator could have used to communicate {I}.

(その意図明示的の刺激は、伝達者が{I}を伝達するのに使用し得る最も関連性の高い刺激である。)

(16) : “Representation and Relevance” (1988) (簡単にRRとする)<sup>63</sup>

Any utterance addressed to someone automatically conveys a presumption of its own relevance. This fact, we call the *principle of relevance*. . . the presumption of relevance has two parts: a presumption of adequate effect on the one hand, and a presumption of minimally necessary effort on the other.

(ある人に発せられる発話はどれでも自動的にその発話自体の関連性を見込みを伝える。この事実を関連性の原則と呼ぶ。 . . . 関連性を見込みは二つの部分から成る。例えば、十分な効果の見込みが一方にあり、最小限に必要な労力の見込みが他方にある。)

(12)から(16)までの関連性の原則に関しては、その表現の仕方には相違が見られるが、基本的には関連性という概念が単なる関連性ではなく、関連性の程度として捉えられており、また関連性の原則がそのような関連性を見込みの伝達として捉えられているのである。しかし、SperberとWilsonが自らRで認めているように<sup>64</sup>、関連性理論の初期の段階では、最適の関連性 (optimal relevance) の見込みではなく、最大の関連性 (maximal relevance) の見込みを考えていたのである。事実、話し手と聞き手は最大の関連性の基準によって行動するとMRで述べられていることから明らかなように<sup>65</sup>、MRでは最大の関連性を見込みの伝達として関連性の原則が捉えられており、従って(12)はそのようなものとして解釈できるのである。そして、(13)と(14)において、(12)と類似の表現がされていることを考えると、IIとDRでも最大の関連性を見込みの伝達として関連性の原則が捉えられていると言えよう。それに対して、(15)では最適の関連性を見込みの伝達として関連性の原則が捉えられているのは明らかであり、また年代的にはRの後にRRが発表されたので、(16)でも同様に捉えられているのである。例えば、RRにおいて<sup>66</sup>、話し手はある正当な目的を持って、最大の関連性を持つには至らない情報の方を提供することがあるが、聞き手の注意を引くのに値するものである為には、その情報が少なくとも十分な効果を生み出すものでなければならない、また聞き手が最小限度の労力で処理できるようにする為には、聞き手が最も簡単に処理できるような情報を話し手は選ばなければならないとしており、従ってそのような効果と労力の関係から最大の関連性ではなく、最適の関連性を見込みの伝達として関連性の原則が捉えられていることが明らかになるのである。同様のことは、勿論Rでも見られる。例えば、効果の面では、伝達者と受け手の利益が一致する必要はなく、伝達者が最も関連性のある情報を話さずに、

関連性の低い情報を伝達することはできるが、受け手の注意を引く為には、受け手が処理する価値を見出すだけの十分な関連性のある刺激を伝達しなければならず、従って関連性の見込みは十分な関連性の見込みとなる一方で、労力の面では、受け手の為には、最も関連性のある刺激、つまり最も処理労力の要らない刺激を選ばなければならず、そこでは伝達者と受け手の利益は一致するのであり、従って関連性の見込みは単なる十分な関連性以上のものとなるのであって、結局効果と労力の両面から言えば、最適の関連性の伝達として関連性の原則が捉えられることになり、それが(15)につながるのである<sup>67</sup>。以上のような関連性の原則をより明確にする為には、効果と労力によって決定される関連性の程度を調べる必要がある。それはまた、関連性の定義に関わるものである。

(17) : MR<sup>68</sup>

having contextual implications in a given context is a necessary and sufficient condition for relevance and can be used as the basis of a definition of relevance.

(ある特定の文脈において文脈含意を持つことは、関連性にとって必要十分条件になり、また関連性の定義の基盤になりえるものである。)

そのような関連性の定義では関連性の原則を明確にするには不十分であるとして、関連性を程度の問題として捉えることを主張する。

Degrees of relevance depend on a ratio of input to output, where output is number of contextual implications, and input is amount of processing needed to drive these contextual implications

(関連性の程度は、入力と出力の比率によって決定される。出力とは、文脈含意の数のことであり、入力とは、それらの文脈含意を引き出すのに必要とされる処理の量のことである。)

そして、二つの発話を比べると、処理の量が同一であるとすれば、文脈含意の数の多い方がより関連性があり、文脈含意の数が同一であるとすれば、処理の量が少ない方がより関連性があるとされている。

(18) : II<sup>69</sup>

We treat relevance as a relation between a proposition P and a set of contextual assumptions {C}.

(関連性を命題Pと文脈想定集合{C}の関係とみなすことにする。)

A proposition P is relevant in a context {C} if and only if P has at least one contextual implication in {C}.

(命題Pが文脈{C}において少なくとも一つの文脈含意を持つ場合、しかもその場合にのみ、命題Pは文脈{C}において関連性を持つ。)

そして、文脈{C}における命題Pの文脈含意は、Pと{C}のいずれか一方からではなく、あ

くまでも両者から演繹的に導き出される結論であるとされている。

以上の関連性の定義は、更に関連性の程度が考慮されて、次のように言われる。

other things being equal, the relevance of a proposition increases with the number of contextual implications it yields and decreases as the amount of processing needed to obtain them increases. Maximizing the relevance of a proposition is thus a matter of accessing, as quickly as possible, a context in which it will yield the maximum of contextual implications in return for the available processing effort. The most relevant propositions will be those which yield a wide range of contextual implications in a small, immediately accessible context.

(他のことが同一であるとすれば、命題の関連性は、その命題によって生み出される文脈含意の数にともなって高くなり、それらの文脈含意を獲得するのに必要となる処理の量が増加するにつれて低くなる。従って、命題の関連性を最大にすることは、その命題が有効な処理労力と引き換えに最大量の文脈含意を生み出すような文脈を出来るかぎり早く入手することである。最も関連性の高い命題は、小規模で、直ちに入手可能な文脈において、広範囲に及ぶ文脈含意を生み出すような命題のことである。)

(19) : DR<sup>00</sup>

a proposition is relevant in a context  $C_1 \dots C_n$  iff it has at least one contextual implication in  $C_1 \dots C_n$ .

(ある命題が文脈  $C_1 \dots C_n$  において少なくとも一つの文脈含意を持つ場合、しかもその場合にのみ、その命題は文脈  $C_1 \dots C_n$  において関連性を持つ。)

以上の関連性の定義は、関連性の程度を考慮して、次のように言われる。

other thing being equal, the more relevant of two propositions in a given context will be the one with more contextual implications... other things being equal, the more relevant of two propositions in a given context is the one which requires least processing. In assessments of relevance, there are thus two factors to take into account: on the one hand, numbers of contextual implications, and on the other hand, the amount of processing needed to obtain them.

(他のことが同一であるとすれば、ある特定の文脈において二つの命題の内のより関連性の高い方は、より多くの文脈含意をもたらす命題である。... 他のことが同一であるとすれば、ある特定の文脈において二つの命題の内のより関連性の高い方は、最も少ない処理を必要とする命題である。従って、関連性を評価するには、二つの要因を考慮に入れることになる。例えば、一方には数多くの文脈含意があり、他方にはそれらの文脈含意を獲得するのに必要となる処理の量がある。)

そして、処理の目的は、処理される命題の関連性を出来るかぎり最大にすることで、即ちある一定量の処理と引き換えに最大の文脈含意を獲得することであるとしている。

⑳) :  $R^{71}$

文脈効果という概念を導入し、文脈含意、強化（以前からある想定強化）、そして矛盾（偽の想定除去）を文脈効果の三つのタイプとしている。

An assumption is relevant in a context if and only if it has some contextual effect in that context.

（ある想定がある文脈において何らかの文脈効果を持つ場合、そしてその場合にのみ、その想定はその文脈において関連性を持つ。）

以上の関連性の定義は、必要十分条件の観点からの定義で、分類的概念として関連性を定義したものであるが、それ自体は間違えているとは言えないが、関連性を相対的概念として定義することがより重要であるとして、文脈効果と処理労力の二つの要因によって決定される関連性の程度の観点から次のように定義する。

*Extent condition 1* : an assumption is relevant in a context to the extent that its contextual effects in this context are large.

*Extent condition 2* : an assumption is relevant in a context to the extent that the effort required to process it in this context is small.

（程度条件 1 : ある想定は、ある文脈においてその想定文脈効果が大きいほど、その文脈において関連性が高い。）

（程度条件 2 : ある想定は、ある文脈においてその想定を処理するのに要する労力が小さいほど、その文脈において関連性が高い。）

㉑) :  $RR^{72}$

人間による情報処理には、何らかの精神的な労力（注意、記憶、そして推論）が必要とされ、そして何らかの認知的な効果（新しい信念の追加、古い信念の消去、あるいは古い信念に対する確信の程度の変化）が得られるとして、効果と労力の観点から関連性の相対的概念を次のように定義する。

a. Other things being equal, the greater the cognitive effect achieved by the processing of a given piece of information, the greater its relevance for the individual who processes it.

b. Other things being equal, the greater the effort involved in the processing of a given piece of information, the smaller its relevance for the individual who processes it.

（a. 他のことが同一であるとすれば、ある与えられた情報の処理によって得られる認知的

効果が大きければ大きいほど、その情報を処理する個人にとってその関連性は高くなる。

- b. 他のことが同一であるとすれば、ある与えられた情報の処理に要する労力が大きければ大きいほど、その情報を処理する個人にとってその関連性は低くなる。)

(17から21)までの関連性の定義に関しては、MR, II, そしてDRにおいて明確に示されていないものが、RとRRにおいて明確な形となって浮き彫りにされると言える。例えば、関連性の定義に関連性の程度を組み入れることによって、結果的に分類的概念としての関連性の定義と相対的概念としての関連性の定義がはっきりと区別され、後者に焦点が合わされることが浮き彫りにされるし、また入力と出力の比率によって決定される関連性の程度が、単に文脈含意の数と処理量の関係によってではなく、文脈効果と処理労力の関係によって決定されることが浮き彫りにされるのである。そのような意味から言えば、更に前述した関連性の原則から言えば、SperberとWilsonの考え方が最も完成した形で示されるのがR（RRは、Rの簡単な解説としてある）であるということになる。それは、文脈効果と処理労力の二要因によって決定される関連性の程度の観点から、関連性の定義を相対的概念としての関連性の定義として捉え、関連性の原則を最適の関連性の見込みの伝達として捉えるという最終的に到達したSperberとWilsonの考え方である。ここでは省略するが、更に個人（聴衆）にとっての関連性の定義（分類的概念と相対的概念）、現象（発話のみならず、現象一般）の関連性の定義（分類的概念と相対的概念）へと発展させていくのである。

RとRRを中心にして言えば、以上の関連性の定義に基づく関連性の原則は、次のような意味を持つことになる。少なくとも言語伝達を成功させる目的を持つ伝達者は、聴衆の注意を引くだけの価値のある発話をする必要があり、その為にはその発話が聴衆にとって関連性のあるものでなければならず、その意味で、その発話が関連性を見込みを伝達するものである必要がある。しかし、それで終わる訳ではない。聴衆の注意を引くということは、その発話によって伝達者が伝える情報を処理する労力を聴衆に要求することを意味し、もし労力を費やすだけで、効果が全く得られないのであれば、聴衆はその発話に注意を向けることはあっても、伝達者の意図に注意を向けたり、推論することによって伝達者の意図を把握しようとはしないであろう。そこで、単に関連性を見込みを伝達するのではなく、効果と労力の関係からどの程度の関連性を見込みが伝達されるかが問題になる。効果の面では、伝達者と聴衆の利益は一致する必要はなく、伝達者がいつも必ず最も関連性の高い発話をするとは限らないが、関連性の極めて低い発話をすれば、聴衆にとっては労力を費やした割には、効果が得られないことになってしまうので、伝達者は十分な効果が得られるようにさせる為に、十分な関連性のある発話をする事になり、聴衆がその発話を少なくとも十分な効果が得られるほどの関連性のあるものと思うように伝達者は意図しなければならないのであり、従ってその発話が少なくとも十分な関連性を見込み（十分な効果の見込み）を伝達するものでなければならないことになる。そこでは、あくまでも効果の面から言えば、

伝達者が最大の関連性のある発話をするように求める聴衆側の利益があり、それに対して、必ずしも最大の関連性のある発話をする事を望まない伝達者側の利益があり、両者の利益が一致しない場合が生まれることになる。しかし、労力の面では、伝達者は自らの意図が誤解されることを望むのではなく、理解されることを望んで発話するのであり、その為に最も簡単に処理できるようにさせる必要があり、聴衆が最小限の労力で処理できるようにさせるという意味で、最大の関連性のある発話をする事になり、聴衆がその発話を最小限の労力で処理できるほどの関連性のあるものと思うように伝達者は意図しなければならないのであり、従ってその発話が最大の関連性のあるもの（最小限の労力の見込み）を伝達するものでなければならないことになる。そこでは、あくまでも労力の面から言えば、伝達者にしても、聴衆にしても、最大の関連性のある発話が両者の利益になり、その点で両者は一致することになる。結局、効果の面から言えば、十分な関連性のある見込み（十分な効果の見込み）の伝達となり、労力の面から言えば、最大の関連性のある見込み（最小限の労力の見込み）の伝達となり、効果と労力を合わせて言えば、最適の関連性のある見込みの伝達となるのである。言い換えれば、効果を出来る限り大きくし、労力を出来る限り小さくすることによって、最適の関連性のある見込みの伝達が可能になるのである。

以上のような関連性の原則に一致する形で伝達者は発話をし、その発話を聴衆は解釈することになるのである。簡単に言えば、Griceのように、発話が関連性を持っているかどうかの問題にされるのではなく、伝達者が発話した時点で、関連性はすでに与えられているとされるのである。たとえ関連性がすでに与えられているとするにしても、関連性を効果と労力の二要因の関係から捉えるようにする限り、関連性の程度を具体的にどのように決めるのかという問題が当然生じるであろう。しかし、SperberとWilsonによれば、関連性とは、具体的に表示する必要のない、また算定する必要のない特性のことであり、表示するにしても、決して数量的評価によってではなく、相対的評価によって表示するものとなるのである<sup>73</sup>。例えば、関連性の程度を算定する為に、効果と労力のそれぞれの数値を出し、前者のプラスの数値と後者のマイナスの数値を合計するのではなく、「関連性がない」、「関連性が弱い」、「関連性が非常にある」などのような表示となるのである。SperberとWilsonが言うように、数量的評価による表示が不可能であることは事実であろうが、数量的評価という印象を受けるのも事実であろう。例えば、(17)における「入力と出力の比率」とか、(18)における「文脈含意の数、処理の量」とか、その他にもあるが、そのような表現は、人間の情報処理があたかもコンピューターによる情報処理であるかのような印象を与え、そのことで数量的評価を行なおうとしているかのような印象を与えるであろう。

また、発話の時点で、そして発話解釈の段階で、関連性がすでに与えられているとすることで、それとは逆に、文脈はすでに与えられているものとしてではなく、選ぶものであるとSperberとWilsonは言うのである<sup>74</sup>。それとは反対に、Griceを含めて多くの場合、発話の時点で、そして発話解釈の段階で、発話される文脈はすでに与えられているとされるのであり、その文脈に基づ



いて、それとの関係でその発話には関連性があるのかどうか判断されるのである。しかし、SperberとWilsonが言うほど、文脈に対する基本的な捉え方に相対立するような食い違いがあるようには思えないのである。というのは、発話された時点で、その発話の文脈はすでに与えられていると考えられるからである。むしろ、文脈全体を漠然とした形で与えられていると捉えるのか、それとも文脈全体に含まれる数多くの要素の内、発話解釈にとって必要な要素を一部選び出し、更に必要であれば、別の要素を一部選び出し、更にまた別の要素を一部選び出すという具合に捉えるのか、そこに相違が生まれると言えよう。但し、発話の時点で、発話解釈にとって必要な文脈要素の全てがいつも必ず与えられているということではなく、欠落部分が存在することもあるのであって、あくまでも一般的に考えて、文脈がすでに与えられているとしても構わないということである。そこで、文脈の果たす役割を文脈効果との関係で見えてみることにする。

DRの例を見ることにする<sup>79</sup>。

(A) C 1 : Jackson has chosen the date of the meeting.

(Jacksonは、会議の日取りを選んだ。)

C 2 : If the date of the meeting is February 1st, the Chairman will be unable to attend.

(もし会議の日取りが2月1日であれば、会長は出席できなくなる。)

C 3 : If the Chairman is unable to attend, Jackson's proposals will be accepted.

(もし会長が出席できなければ、Jacksonの提案は受け入れられることになる。)

C 4 : If Jackson's proposals are accepted, the company will go bankrupt.

(もしJacksonの提案が受け入れられれば、会社は倒産してしまう。)

まず最初に初発文脈C 1があり、次にC 2, C 3, C 4の順序で加えられて、文脈が拡張されるものとする。

(B) The date of the meeting is February 1st.

(会議の日取りは、2月1日です。)

(C) The date of the meeting is February 5th.

(会議の日取りは、2月5日です。)

(D) Jackson has chosen February 1st as the date of the meeting.

(Jacksonは、会議の日取りとして2月1日を選んだ。)

(E) Jackson has chosen February 5th as the date of the meeting.

(Jacksonは、会議の日取りとして2月5日を選んだ。)

初発文脈C 1では、(B)は文脈含意として(D)を持つだけであり、(C)は文脈含意として(E)を持つだけである。

(F) The Chairman will be unable to attend.

(会長は出席できなくなる。)

しかし、初発文脈が拡張されて、C 2が含まれる場合、(B)は文脈含意として更に(F)を持つことになる。

(G) Jackson's proposals will be accepted.

(Jacksonの提案は、受け入れられることになる。)

(H) The company will go bankrupt.

(会社は倒産してしまう。)

文脈が更に拡張されて、C 3、次にC 4が含まれる場合、(B)は文脈含意として(G)を、次に(H)をも持つことになる。

以上の例は、文脈効果の三タイプの一つである文脈含意と処理量の関係に関するものであるが、SperberとWilsonにとっての文脈の意義は十分明らかにされていると言える。具体的には、次のようになる。聞き手が文脈C 1～C 4で(B)を処理する場合、文脈を拡張することによって(D)、(F)、(G)、そして(H)という具合に文脈含意の数を増していくが、その拡張によって必要とされる処理の量はそれほど増えることはないので、それぞれの拡張によって(B)の関連性は次第に高まっていくのであり、従って聞き手には文脈の拡張を続けていく理由が十分あることになる。しかし、(C)の場合、初発文脈をどのように拡張しても、結果的には文脈含意として(E)しか得られず、たとえ拡張を行なっても、処理の量が増すだけで、文脈含意は全く増えることはないので、それぞれの拡張によって(C)の関連性は次第に低くなっていくのであり、従って聞き手には初発文脈C 1を越えて文脈を更に拡張していただくだけの理由がないことになる。

以上のような例(Rにも同様の例はあるが、あえて上掲のDRの例を選んだのは、文脈の果たす役割が簡潔で、明快な形で示され、理解しやすいからである)によって、まず最初に文脈が決定され、次に関連性が問題にされるのではなく、むしろ逆に、まず最初に関連性があると期待し(もしそのような期待がなければ、聞き手は処理しようとは絶対に思わないであろうから)、その期待を正当化するような文脈を選ぶのであるとSperberとWilsonは言うのである。文脈の果たす役割の重要性をはっきりと前面に出していることは高く評価でき、また発話解釈と文脈の関係を論理的に順序立てながら段階的に進めていく方法も十分検討する価値のあるものと言えよう。関連性の原則によって、まず最初に関連性が与えられていると捉えることで、次に関連性が問題になり、それが最適の関連性を可能にする文脈の選択につながり、結果的に文脈の内容の具体的解明につながっていくのである。そのような関連性→文脈という発話解釈の順序に対して、文脈→関連性という順序では、関連性がすでに与えられているとは捉えず、関連性があるかどうかの問題にされ、そこでまず最初に関連性の有無を判断しなければならなくなり、その為には文脈との関係で判断するしかなく、文脈がすでに与えられており、すでに決定されているものとして捉えなければ、関連性の有無の判断そのものができなくなってしまうので、まず最初に文脈が与え

られているとし、その上で関連性が問題にされるという過程を経なければならないのである。発話解釈の順序を関連性→文脈とすべきか、それとも文脈→関連性とすべきか、どちらにより正当性があるかについての最終判断はここではしないことにする。ここでは、両者の相違を推論過程の面から簡単に見ることとする。例えば、Griceの推論過程は、発話と文脈の関係から帰納的に含意を推論していくもので、発話の時点で、ある特定の文脈が与えられ、決定されるものとし、その文脈に基づいて聞き手が含意を推論していくことになるが、文脈の果たす役割の重要性を強調しながらも、文脈そのものの具体的解明を行なっている訳ではないのである。それに対して、SperberとWilsonの推論過程は、発話と文脈の関係から演繹的に含意を推論していくものである。

(A) (a) *Peter* : Would you drive a Mercedes?

(あなたはベンツを運転しますか。)

(b) *Mary* : I wouldn't drive ANY expensive car.

(私は、どんな高級車も運転はしません。)

(B) A Mercedes is an expensive car.

(ベンツは高級車である。)

(C) Mary wouldn't drive a Mercedes.<sup>76</sup>

(メアリーは、ベンツは運転しないでしょう。)

SperberとWilsonは、(B)を含む文脈では、(Ab)は(C)を含意するとしており、(B)を(Ab)の含意的前提(含意的想定、文脈想定)とし、(C)を(Ab)の含意的結論(文脈含意)とし、含意的前提と含意的結論は共に含意であるとしている。そして、(Ab)と(B)から(C)を推論するとしている。前掲の例に関して言えば、C1～C4は全て文脈想定(含意的前提)であり、それらの文脈想定集合としてある文脈において、(B)から文脈含意(含意的結論)として(D),(F),(G)、そして(H)を段階的に推論していくことになる。「前提」と「結論」という表現から明らかなように、文脈は漠然とした形で存在するのではなく、あくまでも結論を導き出す為の必要不可欠な前提条件として存在し、その前提条件が明確にされなければ、結論を導き出すことができなくなってしまうのであり、従って文脈の内容の具体的解明が当然必要になり、それによって初めて発話と前提条件から演繹的に結論を導き出すことができることになるのである。言い換えれば、前提条件である文脈想定集合としての文脈に関して、その文脈に含まれる一つ一つの文脈想定がまず明らかにされなければならず、その上で発話との関係から演繹的に文脈含意が推論されるのであり、結局  $U + \{C_1, \dots, C_n\} \rightarrow CI$  (Uは発話を、 $\{C_1, \dots, C_n\}$ は文脈想定集合を、CIは文脈含意を表す) という演繹的推論過程となるのである。しかも、Griceとは異なり、文脈含意だけでなく、文脈想定も発話の含意である為、前者と同様に、後者も発話によって含意されるものとして特定化しなければならないのである。但し、前者とは異なり、後

者では演繹的に含意を推論するのではなく、それ以前の談話、百科事典的記憶、知覚によって観察できる周囲の環境に関する情報などから含意を特定化するのである。

帰納的に含意を推論する時には、勿論文脈の重要性を認めながらも、文脈全体を漠然とした形で捉え、それに含まれる各要素を特定化しなくても可能であるが（含意を推論する為に、一体幾つの要素が必要で、それらの要素がどのように絡み合っているのかを明確にするのは困難であるし、少なくとも断定するのは困難であるから）、演繹的に含意を推論する為には、文脈を $\{C_1, \dots, C_n\}$ として捉え、 $C_1, \dots, C_n$ の中の各文脈想定が特定化されなければならず、もし特定化ができなければ、前提条件が欠落することになり、結論としての文脈含意を導き出すことができなくなってしまふのである。しかし、そのような相違はあるが、いずれの方法を受け入れるにしても、発話の時点で、その発話によってある特定の文脈の枠組みが決定されるのであり（「雨が降っている。」という発話は、その発話と関連する文脈をある一定の方向で枠組みするのであって、それに関連のない文脈は削除されるのである）、その意味で言えば、文脈は与えられ、決定されているものとして考えることはできよう。むしろ、ある特定の文脈の枠組みの中で、実際の会話では、聞き手はその文脈に含まれる諸要素を特定化してから含意を推論するのではなく、直観的に推論するとするのか（例えば、真夜中に真暗な道を歩いている時に、前方から二つの光がこちらに向けて来れば、直観的に自動車が走ってくると推論するであろう）、それとも聞き手はその文脈の各要素（ $\{C_i\}$ ）のように一つの要素から構成される場合もあれば、 $\{C_1, \dots, C_n\}$ のように複数の要素から構成される場合もある）を特定化し、それに基づいて含意を推論するのであり、ただ瞬時に行なわれるだけで、そのことは決して演繹的推論を否定することを意味するのではないとするのか、そのような文脈に対する視点の相違があると考えられよう。従って、SperberとWilsonにしても、Griceと同様、発話の時点で、まず最初に文脈が与えられ、決定されているということ（ある特定の文脈の枠組みが与えられ、決定されているという意味）を否定することはできないであろうが、その意味を発話解釈に必要な文脈を構成する各要素の特定化と解釈するならば、SperberとWilsonの言うように、まず最初に文脈が与えられ、決定されているとすることは単純にはできないであろうし、またある特定の文脈の枠内で、幾つの要素がどのように互いに絡み合っているのかを特定化することは困難であり、むしろ幾つかの要素の複雑な絡み合いの中で推論するのが現実であるとするならば、Griceのように、ただ漠然と文脈がすでに与えられており、決定されているとするしかないであろう。

文脈効果の三タイプそれぞれについて、簡単に見てみることにする。

(A) (a) Peter is richer than Sam. [certain]

(PeterはSamより金持ちだ。 [確実])

(b) Sam is richer than Bill. [certain]

(SamはBillより金持ちだ。 [確実])

関連性に関する理論

- (c) Bill is richer than Jim. [certain]  
(BillはJimより金持ちだ。 [確実] )
- (d) Jim is richer than Charles. [certain]  
(JimはCharlesより金持ちだ。 [確実] )
- (e) Sam is richer than Sue. [strong]  
(SamはSueより金持ちだ。 [強] )
- (f) Sue is richer than Jim. [very weak]  
(SueはJimより金持ちだ。 [極弱] )
- (g) Sue is richer than Charles. [strong]  
(SueはCharlesより金持ちだ。 [強] )

文脈(Aa-g)が頭に入っている聞き手は、話し手の言うこと全てを確実であると受け取ると仮定する。そして、話し手は次の (B) あるいは (C) を主張する立場にいと仮定する。

(B) Sue is richer than Jim.  
(SueはJimより金持ちだ。)

(C) Sue is richer than Peter.  
(SueはPeterより金持ちだ。)

そこで、文脈(Aa-g)で (B) は二つの文脈効果を持つことになる。第一は、(Af) を極弱から確実に強化することである。第二は、(Ag)を強から確実に強化することである ( (Ag) [強] は、(Ad) [確実] と (Af) [極弱] から得られるものである為、(Af) が極弱から確実に強化されることで、(Ag) が強から確実に強化されるからである)。それに対して、(C) は文脈(Aa-g)で五つの文脈効果を持つことになる。

(D) Sue is richer than Sam. [certain]  
(SueはSamより金持ちだ。 [確実] )

(E) Sue is richer than Bill. [certain]  
(SueはBillより金持ちだ。 [確実] )

第一は、(C) が (D) を文脈的に含意することである。第二は、(C) が (E) を文脈的に含意することである。というのは、(Aa-g)の中には、Peter > Sam > Bill > Jim > Charles という関係、Sam > Sue > Charles という関係、そして Sue > Jim という関係が存在しており、最初の関係だけが確実に基づくもので、二番目と三番目の関係は強あるいは極弱に基づくものであるが、(C) が確実である為、Sue > Peter > Sam > Bill > Jim > Charles という関係が成り立つことになるからである。第三は、(D) が (Ae) と矛盾し、しかも前者の方が後者よりも強いので(前者が確実で、後者が強であるから)、(Ae) が消去されることである。第四は、(C) によって (Af) が極弱から確実に強化されることである。第五は、(C) によって (Ag) が強

から確実に強化されることである。第四と第五に関しては、Sue>Peter>Sam>Bill>Jim>Charlesという全てが確実にの関係にある為である。以上のことから、(B)と(C)が確実にであると仮定すれば、(20)の関連性の定義に従って、(C)の方が(B)よりも文脈効果が大きく((B)では二つの強化があるだけであるが、(C)では二つの文脈含意、一つの矛盾、そして二つの強化がある為)、また必要とされる処理労力が同一であるので(文脈効果をもたらすのに必要な余分な労力を勘定に入れにくいことにする)、(C)の方が(B)よりも関連性が高いという結論に到達することができることになる<sup>7)</sup>。

以上の例によって、文脈含意、強化、矛盾という文脈効果の三タイプと文脈の関係が明らかになるであろうし、先の例(特に、文脈の拡張の意味)を加えて考えれば、文脈と文脈効果の全体的な関係がかなりはっきりしてくるであろう(処理労力に関しては、必ずしも明確にされているとは言えないが、文脈効果に関しては、文脈含意の分析を中心に行っている初期の論文と比べれば、より詳細になり、かなりの説得力のあるものになっていると言えよう)。但し、先に問題にした発話解釈の順序(文脈→関連性として文脈がまず最初に与えられているものとし、その文脈との関係で関連性があるかどうかを判断すべきとするのか、それとも関連性→文脈として関連性がまず最初に与えられているものとし、その関連性を具体的に明らかにする為に、必要とされる文脈の各構成要素を特定化する必要があるとするのか)に関して、これで決着がついたという訳ではない。発話の時点で、まず最初にある特定の文脈の枠組みが与えられ、決定されるということをお否定することはできないであろうし、むしろそれを認めた上で発話解釈の順序が問題になると言えよう。言い換えれば、発話によって文脈 $C\{C_1, \dots, C_n\}$ という特定の文脈の枠組みがまず最初に与えられ、決定されるものとし、その上で $C\{C_1, \dots, C_n\}$ の中の構成要素の数と各構成要素の全ての内容を具体的には明示しないで(但し、発話解釈にはある構成要素の内容の特定化は必要になるが)、その文脈(単純に文脈Cと言うこともできよう)との関係で関連性があるかどうかを問題にし、帰納的に含意を推論していくのか、それとも関連性がすでに与えられているものとし、その関連性を具体的に明らかにする為に、 $C\{C_1, \dots, C_n\}$ の中の発話解釈に実際必要な構成要素の数を決定し、それらの各構成要素の内容を特定化し、その文脈と発話から演繹的に含意を推論していくのか、いずれのかの方向に進むと言えよう(前述した $\{C_1, \dots, C_n\}$ とは異なり、ここでは文脈の中に発話解釈に直接関係のある構成要素だけを含めるとするSperberとWilsonの捉え方よりは広い意味で使用しており、発話によって与えられ、決定される特定の文脈の枠組みとして $C\{C_1, \dots, C_n\}$ があり、その中には発話解釈に実際に使用される構成要素だけでなく、実際には使用されない構成要素も含まれるものとするのであって、従ってSperberとWilsonの言う文脈はあくまでもその一部として入り、その一部の中で初発文脈が $C_1$ であるとすれば、 $C_2$ へと文脈が拡張され、更に $C_3$ へと拡張されるという具合になる)。いずれの方向に進むべきかの問題に決着をつけることはできないが、 $C\{C_1, \dots, C_n\}$ をある特定の文脈の枠組みとすることで、

Griceのように、文脈を漠然とした形で捉えることはなくなり（実際には、Griceが「文脈」と言っても、当然明らかになっているとして全く触れずに終えたり、触れるにしても、一つあるいはごく少数の構成要素しか挙げないのである）、またSperberとWilsonのように、発話解釈に直接必要な構成要素に限定する必要もなくなり、様々な発話のケースの解釈に適用できることになるであろう。例えば、実際の会話で、ある人がある要求をし、別の人がそれに反応する時、両者が頭に描く文脈の枠組み（構成要素の数と各構成要素の内容）が完全に一致するとは限らず、またたとえ一致するとしても、全構成要素の内、どの構成要素を中心にしているかは食い違うことがあるからである。

文脈を発話によって与えられ、決定される特定の文脈の枠組み  $C\{C_1, \dots, C_n\}$  と捉えれば、次のような説明が可能となろう。すでに述べたGriceの例を使用することにする。なお、ここでは文脈のみを扱うことにする。Aが「スミスには近頃ガールフレンドがいないようだ。」と言い、それに対してBが「最近、彼は何度もニューヨークを訪ねている。」と言う場合、Griceによれば、Bはニューヨークにスミスのガールフレンドがいることを含意していることになるが、Dascalによれば、ニューヨークにはスミスのガールフレンドがいないことを含意していることになる。両者にとっては、文脈は漠然とした形で捉えられているので、単純に  $C$  となるが、 $C\{C_1, \dots, C_n\}$  を使用して考えれば、同一の発話のやりとりを対象にしながら、両者は  $C\{C_1, \dots, C_n\}$  の中の異なる構成要素集合（単一の構成要素から成る集合、複数の構成要素から成る集合、そのいずれでも構わないが）に基づいて異なる含意を推論することになると言える。では、 $C\{C_1, \dots, C_n\}$  の一部として、Griceはある特定の構成要素集合を選び出し、Dascalは別の特定の構成要素集合を選び出すことになるが、どのような根拠でなされるのであろうか。その問題に対する解答は示されていないのである。但し、帰納的推論形式によって含意の算出を行なうのであるから、経験的で、直観的な理由で、ある特定の構成要素集合を選ぶことになると言えよう。そのことが曖昧さを残す原因になっているのであろう。

そして、SperberとWilsonにとっては、文脈はかなり詳細に分析されており、 $\{C_1, \dots, C_n\}$ （(18)では文脈を文脈想定集合  $\{C\}$  とし、(19)では文脈  $C_1, \dots, C_n$  としているので）となるが、ここでも  $C\{C_1, \dots, C_n\}$  を使用して考えれば（なお、SperberとWilsonの  $\{C_1, \dots, C_n\}$  は、あくまでも  $C\{C_1, \dots, C_n\}$  の一部としての集合とする）、ただ明確な形では述べていないので、断定的な言い方はできないが、Griceが結論として導き出す含意を受け入れるのか、それともDascalの結論の方を受け入れるのかは別にして、少なくともある特定の構成要素集合を選び出し、それを前提条件にして含意を演繹的に推論することは確かである。もしそうであるとすれば、何を根拠にしてその特定の構成要素集合を選び出すことができるのであろうか。結局、GriceとDascalと同様に、SperberとWilsonも同じ問題に直面することになるのである。しかし、前者の二人にとっては、帰納的推論形式によって含意を導き出し、また同様の方法である特定の構成要素集

合を選び出すと言えるが（演繹的推論形式とは異なり，帰納的推論形式による限り，絶えず曖昧さは残るのである），後者の二人にとっては，含意を演繹的推論形式によって導き出すとしている以上，どうしても前提条件を明示する必要がある（曖昧なままでは，演繹的推論形式は崩れることになるので），その前提条件となるある特定の構成要素集合を選び出す根拠をはっきりと示さなければならないことになり，それだけ問題は深刻になるであろう。その根拠が示されていない訳ではない。例えば，文脈効果と処理労力の関係から最適の関連性を生み出すような文脈を見つけ出すとか，ある発話がなされる以前の談話，百科事典的記憶，知覚によって観察できる周囲の環境に関する情報などによって特定化するとか，幾つかの根拠が示されている。しかし，そのような根拠で，果たして上述の Grice と Dascal の食い違いを説明できるのでしょうか。C  $\{C_1, \dots, C_n\}$  の中で，発話解釈の為に実際に使用される構成要素集合ではなく，むしろ実際には使用されていない別の構成要素集合の方が真の前提条件になりえるものかもしれず，一体どのように決めることができるのでしょうか。Grice にとっての含意とは異なり，Sperber と Wilson にとっては，文脈含意だけでなく，文脈想定（発話解釈の為に実際に使用される特定の構成要素集合）も含意となるのであるが，前者は演繹的推論形式で導き出されるが，後者は演繹的推論形式では無理であり，結局帰納的推論形式で導き出されるということになる。結果的には，Grice と Dascal と同様，Sperber と Wilson の場合も，C  $\{C_1, \dots, C_n\}$  の中から帰納的方法によってある特定の構成要素集合を選び出すことになると言えよう。従って，B の発話は，ガールフレンドがいることを含意することも，いないことを含意することも，いるかいないか分からないことを含意することも可能であり，その為に必要な特定の構成要素集合もそれぞれ異なってくるのであり，いずれが正しい発話解釈であるかを決めるには，発話の場面を考慮に入れて，経験的で，直観的な判断をするしかなく，曖昧さは絶えず残ることになるのである。

以上のように，Grice にしても，Dascal にしても，Sperber と Wilson にしても，発話解釈の際，発話によって与えられ，決定される特定の文脈の枠組み C  $\{C_1, \dots, C_n\}$  の中から，その発話を解釈する為に実際に使用する特定の構成要素集合を選び出す方法に関しては，共通点が見られ，従って共通の問題点を抱えていることになるのである。たとえどのような方法であれ，ある特定の構成要素集合が選ばれたとした上で，その後には相違点が現われてくると言える。そして，含意を推論するのに必要なその特定の構成要素集合をただ漠然と C と捉えて，文脈の具体的解明をせずに曖昧なままに残すことも問題であるが，また  $\{C_1, \dots, C_n\}$  としながらも，前述した二例のように，各構成要素を論理的につながりのあるものとするのも，別の意味での曖昧さを残すことになり，その点で問題であろう。勿論，文脈の具体的解明を試みた点で，Sperber と Wilson の主張の意義は認めなければならないが，曖昧さを除去することが果たして可能であるのかという疑問が当然生まれてくるであろうし，実際の会話における推論過程で曖昧さが存在することを積極的に認める研究者が多くいることも事実である。むしろ，その曖昧さこそ，日常的な会話の



特徴と言えるのかもしれない。

今まで検討してきたことは、SperberとWilsonの関連性理論の一部にすぎない。それは、あくまでも「関連性」概念に対する取組み方を明らかにすることが本稿の直接の検討対象であったからであり、例えば、刺激－注意、関連性の原則、関連性の定義、文脈の捉え方などを大雑把に調べたにすぎない。従って、関連性理論は勿論のこと、「関連性」概念に対する取組み方に関しても、例えば、最適の関連性の可能性、文脈効果と処理労力の関係、処理労力の定義、(18)と(19)における「命題」の(20)における「想定」への変化の意味などの関連性の定義の問題点が残されており、具体的に検討しなかった事柄が多くある為、ここで正当性を問題にすることはできない。しかし、「関連性」概念に対するSperberとWilsonの取組み方はある程度明確になったであろうし、少なくともGriceの取組み方とDascalの取組み方との相違は明らかになったであろう。そして、十分な検討を加えることはできなかったが、「関連性」概念に対するSperberとWilsonの取組み方は、関連性を積極的に分析し、理論化しようとした点で、その正当性は別にして、高く評価されるべきものであり、特に関連性の原則は、今後更に検討を加えていく必要のある重要な対象であると言える。

最後に、関連性の原則と協調の原則について簡単に触れて終えることにする。会話が言語伝達を成功させる目的でなされる以上、会話の参加者の間に何らかの協調関係が存在していなければならないが、関連性の原則よりも協調の原則の方が、要求される協調の程度が大きいとSperberとWilsonは批判するのである。たとえそれが正しいとしても、Griceと同様に、SperberとWilsonの場合も、実際の分析は発話の段階であって、発話の連続体としての会話の段階ではないのであり、そこで会話にも関連性の原則を適用して分析する場合、極めて単純な言い方をすれば、何らかの協調関係が存在する以上、会話の参加者の発話は全て何らかの関わりがあることになり、個々の発話のやりとりの間に関連性があるとしても、それらを結びつけていく一貫性のある連鎖（勿論、会話が一つの長い連鎖から構成される場合もあれば、複数の長短の連鎖から構成される場合がある）をどのように説明していくのであろうか。発話の連鎖性は、協調の原則では十分説明できず、関連性の原則にしても、個々の発話のやりとりの関連性はともかくとして、納得のいく形で説明できるのであろうか。発話の連鎖をただ単に関連性のある発話の連鎖であるとするだけでは、その連鎖がどの方向に進むのか、その連鎖がどこで切れて、また新たな連鎖がどこから開始されるのか、その他のことが説明できなくなるであろう。従って、単に関連性があるとするだけでは、発話の連鎖性を十分納得のいく形で説明することはできず、その関連性の具体的解明が更に必要となろう。

#### 4 最後に

関連性に関する議論の内、本稿ではGriceの取組み方、Dascalの取組み方、そしてSperberとWilsonの取組み方を取り上げ、具体的に検討してきた。そして、それぞれの取組み方を明確にし、そのことで相違点を浮き彫りにすることを主目的にしてきたが、どちらの取組み方がより正当性を持つのかの判断は出来る限り避けるようにした。というのは、今回検討した関連性に関する議論は、含意の推論過程（Dascalの場合は、推測過程）に関する議論と深く結びつき、切り離すことの出来ないものであり、後者の議論の具体的検討なしには前者の議論に正当性の判断を下すことが出来ないのであるが、それをあえて前者の議論に焦点を合わせ、それに必要な限りにおいて後者の議論を扱ったにすぎないからである。そのような制約はあるが、関連性に関する議論に焦点を合わせることによって、様々に異なる取組み方が可能であり、様々に異なる分析方法が可能であることを示すことはそれ自体として意義があると言えよう。

上記の三つの取組み方の関係を簡単に要約すれば、次のように言える。まず最初に、Griceの場合、関連性の問題を積極的に取り上げた点では、高く評価されるべきものであるが、あくまでも協調の原則の遵守が前提にされ、その上で会話の格率の一部である関連性の格率として位置付けられ、例えば、含意が存在すると考えて初めて、見かけ上は関連性のないような発話が、実際は関連性のある発話であることが明らかになるという具合に、含意の存在によって関連性があるかどうか判断されることになるのである。次に、Dascalの場合は、含意の推測過程の第一段階として、最初に関連性があるかどうか判断され、その後含意の探索が開始されることになり、関連性の問題が更に前面に出され、結局関連性の格率が会話の上位格率として位置付けられるのであり（Griceの協調の原則と会話の格率は維持されていると考えられるが、Dascalの主張を発展させれば、そのような枠は超えられてしまうであろう）、その際関連性に対しては、刺激－注意の関係に基づく心理的説明がなされるのである。また、Griceの方法では重要な役割を果たす文脈を無視していると批判し、文脈の関係からも関連性を捉えるべきであるとしているManorの意見も付け加える必要があろう。そして、SperberとWilsonの場合は、関連性の問題が更にまた前面に出されるが、それは関連性があるかどうかの問題ではなく、発話の時点で、すでに関連性は与えられ、決められているとすることで処理し、結局協調の原則と会話の格率を否定し、関連性の原則を主張することになり、しかも関連性の刺激－注意の関係による心理的説明が更に強調されるのである。文脈に関しては、Griceの方法で重要な役割を果たしている文脈が、Dascalの方法では後退することになるが（但し、文脈の果たす役割を無視しているとか、否定しているとは言えないが）、共に漠然とした形で文脈を捉えている点では共通しているのに対して、SperberとWilsonにとっては、演繹的推論形式によって結論としての含意（文脈含意）を導き出す為に絶対不可欠な前提条件である文脈（ある特定の文脈想定集合）を特定化する必要

があるのである。

結果的には、Grice→Dascal→Sperber・Wilsonという関係は、会話の格率の単なる一部としての関連性の格率→会話の上位格率としての関連性の格率→関連性の原則という関連性の問題に対する捉え方の変化と見ることができるのである。それはまた、関連性の心理的説明の重要性の増加過程、そして文脈の果たす役割の重要性の増加過程と見ることにもできるのである。しかし、それらに共通する点は、発話解釈の分析と理論化であり、従って基本的には個々の発話の段階が問題にされるのであって、個々の発話が連続して、話のやりとりを成し、更に会話を成す段階でも、同様の方法で構造的解明が十分可能であるかどうかは別問題であると言えよう。

なお、SperberとWilsonの主張に関しては、関連性の問題を新たな視点から取り組み、従来必ずしも明確にされてこなかった関連性に関する原則と定義を詳細に説明しており、その意味から言えば、十分な検討を要するものであり、そのことで関連性理論の全体像を浮き彫りにする必要があるのであるが、本稿では基本的な考え方を簡単に検討し、その特徴を示したにすぎないことをここで断っておかなければならない。

注

- (1) H.P.Grice, "Logic and Conversation", in P.Cole and J.L.Morgan(eds.) *Syntax and Semantics*, Volume 3 (New York:Academic Press,1975), pp. 43-44.
- (2) K.I.Manktelow and D.E.Over, *Inference and Understanding*, (London:Routledge,1990), p.54.
- (3) H.P.Grice, *ibid.* p.45.
- (4) H.P.Grice, *ibid.* p.43.
- (5) H.P.Grice, *ibid.* p.45.
- (6) H.P.Grice, *ibid.* pp.45-46.
- (7) H.P.Grice, *Studies in the Way of Words*, (Cambridge, Massachusetts:Harvard University Press, 1989), pp. 370-371.
- (8) H.P.Grice, *ibid.* pp.368-372.
- (9) G.M.Green, *Pragmatics and Natural Language Understanding*, (Hillsdale,New Jersey:Lawrence Erlbaum Associates, 1989), p.88.
- (10) H.P.Grice, "Logic and Conversation", p.52.
- (11) H.P.Grice, *ibid.* p.47.
- (12) J.Hintikka, "Logic of Conversation as a Logic of Dialogue", in R.E.Grandy and R.Warner (eds.) *Philosophical Grounds of Rationality*, (Oxford:Oxford University Press, 1986), p. 259.
- (13) D.Sperber and D.Wilson, *Relevance*, (Oxford:Basil Blackwell, 1986), pp.162-163.
- (14) H.P.Grice, "Logic and Conversation", pp.46-47. *Studies in the Way of Words*, p.371.
- (15) R.M.Kempson, *Presupposition and the Delimitation of Semantics*, (Cambridge:Cambridge University Press, 1975), p.152.
- (16) G.Gazdar, *Pragmatics*, (New York:Academic Press, 1979), pp.54-55.

- 17) J.M.Sadock, "On Testing for Conversational Implicature", in P.Cole (ed.) *Syntax and Semantics*, Volume 9 (San Diego, California:Academic Press, 1978), p.285.
- 18) F.Recanati, *Meaning and Force*, (Cambridge:Cambridge University Press, 1987), pp.131-133.
- 19) R.A.Van Der Sandt, *Context and Presupposition*, (London:Croom Helm, 1988), p.59.
- 20) D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* p.36.
- 21) M.Dascal, "Conversational Relevance", in A.Margalit (ed.) *Meaning and Use*, (Dordrecht, Holland:Reidel, 1979), p.154.
- 22) G.M.Green, *ibid.* pp.96-97.
- 23) H.P.Grice, "Logic and Conversation", p.46.
- 24) H.P.Grice, *ibid.* p.47.
- 25) H.P.Grice, *ibid.* p.49.
- 26) M.Dascal, *ibid.* p.154.
- 27) J.R.Searle, "Conversation", in J.R.Searle et al (*On Searle on Conversation*, (Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins, 1992), p.14.
- 28) H.P.Grice, *ibid.* p.43, p.50.
- 29) H.P.Grice, *ibid.* p.51.
- 30) H.P.Grice, *ibid.* p.51.
- 31) H.P.Grice, *ibid.* p.54.
- 32) H.P.Grice, "Further Notes on Logic and Conversation", in P.Cole (ed.) *Syntax and Semantics*, Volume 9, p.114.
- 33) G.M.Green, *ibid.* p.91.
- 34) M.Dascal, *ibid.* p.155.
- 35) M.Dascal, *ibid.* p.157, p.172.
- 36) R.Manor, "Comments", in A.Margalit(ed.) *Meaning and Use*, p.177.
- 37) M.Dascal, *ibid.* p.159.
- 38) M.Dascal, *ibid.* pp.159-160.
- 39) R.Manor, *ibid.* pp.177-178.
- 40) M.Dascal, *ibid.* pp.161-166.
- 41) R.Manor, *ibid.* pp.179-180.
- 42) M.Dascal, *ibid.* p.171.
- 43) M.Dascal, *ibid.* pp.167-169, p.171.
- 44) H.P.Grice, "Logic and Conversation", p.50.
- 45) M.Dascal, *ibid.* p.173.
- 46) M.Dascal, *ibid.* pp.168-169.
- 47) M.Dascal, *ibid.* p.170.
- 48) M.Dascal, *ibid.* p.169.
- 49) D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.48-50.
- 50) D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.153-156.
- 51) D.Wilson and D.Sperber, "Representation and Relevance", in R.M.Kempson(ed.) *Mental Representations*, (Cambridge:Cambridge University Press, 1988), p.140.

関連性に関する理論

- 52 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.153–154.  
53 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* p.121.  
54 D.Wilson and D.Sperber, “Inference and Implicature”, in C.Travis(ed.) *Meaning and Interpretation*, (Oxford:Basil Blackwell, 1986), pp. 72–73.  
55 M.Dascal, *ibid.* pp.160–161.  
56 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.161–163.  
57 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* p.261.  
58 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* p.261.  
59 D.Sperber and D.Wilson, “Mutual Knowledge and Relevance in Theories of Comprehension”, in N.V.Smith(ed.) *Mutual Knowledge*, (London:Academic Press, 1982), p.75.  
60 D.Wilson and D.Sperber, *ibid.* p.54.  
61 D.Wilson and D.Sperber, “On Defining Relevance”, in R.E.Grandy and R.Warner(eds.) *Philosophical Grounds of Rationality*, p.249.  
62 D.Sperber and D.Wilson, *Relevance*, p.158.  
63 D.Wilson and D.Sperber, “Representation and Relevance”, pp.140–141.  
64 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* p.261.  
65 D.Sperber and D.Wilson, “Mutual Knowledge and Relevance in Theories of Comprehension”, p.74.  
66 D.Wilson and D.Sperber, *ibid.* p.141.  
67 D.Sperber and D.Wilson, *Relevance*, p.157.  
68 D.Sperber and D.Wilson, “Mutual Knowledge and Relevance in Theories of Comprehension”, pp.73–74.  
69 D.Wilson and D.Sperber, “Inference and Implicature”, pp.54–57.  
70 D.Wilson and D.Sperber, “On Defining Relevance”, pp.245–246, pp.249–252.  
71 D.Sperber and D.Wilson, *Relevance*, pp.108–117, pp.122–125.  
72 D.Wilson and D.Sperber, “Representation and Relevance”, p.140.  
73 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* p.132.  
74 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.132–133.  
75 D.Wilson and D.Sperber, “On Defining Relevance”, pp.254–255.  
76 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.194–195.  
77 D.Sperber and D.Wilson, *ibid.* pp.127–128.

(使用邦訳文献)

D. スペルベル・D. ウイルソン著, 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳『関連性理論－伝達と認知－』研究社出版1993年

ジョージア M. グリーン著, 深田淳訳『プラグマティックスとは何か－語用論概説』産業図書 1990年

ジェフリー N. リーチ著, 池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店 1987年

S. C. レヴィンソン著, 安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』研究社出版 1990年